

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

reed

No. 69

May, 2022

関西大学ニュースレター
発行日：2022年(令和4年)5月31日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
www.kansai-u.ac.jp

2022年に大学昇格100年を迎えます。

最先端の
傾奇者であり続けるために

■対談 片岡愛之助 歌舞伎俳優 × 前田裕 関西大学学長
○上方の伝統を継承し、新たな歴史を創造する

AINOSUKE KATAOKA

■大学昇格100年記念特集

関西大学は2022年6月5日に
大学昇格100年を迎えます

■対談

かぶきもの
最先端の傾奇者で
あり続けるために

◎上方の伝統を継承し、新たな歴史を創造する

片岡 愛之助 × 前田 裕
 ・歌舞伎俳優 × ・関西大学 学長

6月5日の大学昇格100年を目前にした今号では、400年以上の歴史を持つ歌舞伎の未来を担う花形役者の一人、片岡愛之助さんを関西大学梅田キャンパスにお迎えし、前田裕学長と対談を行った。歌舞伎俳優と教育・研究者。全く異なる分野ながら、上方文化への愛着と振興を願う思い、変化への挑戦を厭わない覚悟と気概、次代へ伝統を継承する使命感などについて語り合った。



関西大学 梅田キャンパス

◆100年前、関大生は道頓堀で歌舞伎を観たか

前田 関西大学は大阪で開校した大学で、136年の歴史があり、1922(大正11)年に大学に昇格して今年で100年を迎えます。関西大学は大阪に育てられた大学ですので、大阪の文化遺産を研究し、大阪文化の発展、振興に寄与したいという思いは特に強く、大阪松竹座が完成する以前の大阪・道頓堀の街並み「道頓堀五座」※1の復元CG映像の制作なども行ってきました。

愛之助 先ほど映像を拝見しました。驚きました。あの時代の道頓堀を本当に歩いているような気分になって、こういうことだっ

たのかと、その世界に浸りました。

前田 ちょうど関西大学が大学昇格を果たす、少し前の時代の道頓堀を復元したものですので、当時の関大生も、この芝居小屋に観に行っていたのかもしれないね。

愛之助 道頓堀五座に数えられた朝日座、角座、中座にも、実は出演したことがあります。しかし、今は五座すべてが形態を変え、姿を消してしまいました。明治時代当時の道頓堀をもちろん私は知りませんが、装いを新たにしながら、伝統を引き継いできた劇場の舞台に立ったことがある身としては、このような形で復元していただくことは大変ありがたく、うれしかったです。



※1 CGによる街並み復元映像「道頓堀五座の風景」……関西大学大阪都市遺産研究センター(現・なにわ大阪研究センター)が、1923(大正12)年に松竹座が完成する以前の道頓堀の街並みを2012年にCGで復元。道頓堀界隈は江戸時代から、道頓堀五座と呼ばれた芝居小屋(浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座)や芝居茶屋が立ち並び、にぎわっていた。

前田 そう言っていただけると良かったです。当時、道頓堀で上演されていた歌舞伎や文楽など上方の演芸文化が、脈々と現在まで伝わっていることを、より多くの方に知ってもらうため、これからも研究を続けていきたいと考えています。

さて、ご縁がありまして、今回、関西大学の客員教授をお願いすることになりました。

愛之助 お話をいただいてとてもうれしかったのですが、本当に私でいいのかと、実はすごく悩みました。

前田 各界でご活躍されている方々を客員教授として招聘していますが、大学としては、若い学生たちに知識や情報だけではなく、“思い”を伝えていただける方をお願いしたいと考えており、強い思いを持ち、伝統芸能を守り続けていらっしゃる片岡愛之助さんにぜひお力添えをいただきたいと、この度ご依頼させていただきました。

◆伝統を明日に継承、今日の新作を未来の古典に

愛之助 歌舞伎に対する“思い”ということでお話しさせていただきますと、私は歌舞伎の家に生まれた者ではございません。実

家は堺市にある船のスクルーを製造する会社です。鉄工所と歌舞伎、全く違う分野ですが、実家の父が子供同士の触れ合いのために松竹芸能の子役オーディションに応募したのが、私の歌舞伎俳優人生の始まりでした。それが6歳ぐらいの頃でしょうか。初めは舞台やテレビドラマに子役として出演していましたが、初めて歌舞伎のお仕事をいただいた時に、歌舞伎が大好きになってしまったんです。

子供ですから、もちろんストーリーは分かりません。でも、顔を白塗りしていること自体が面白く、舞台の「盆」が回転したり、上がったりがったり、立ち回りやとんぼ返りしたり、宙吊りで飛んだりするのを見ているだけでも楽しくて。テーマパークに来たような感じですね。その頃から今までずっと歌舞伎が好きなんです。

愛之助さん8歳の頃。「与話情浮名横櫓」の楽屋にて▶





時代の最先端で、傾いていること、をしている人たちが「傾奇者」であって、「歌舞伎」なんです。私たちが今やっている歌舞伎がさらに100年、200年経つと古典になっているかもしれません。明日、未来へとつながっていくと思いつながりながら、新しい作品を創作しています。

傾奇者



十月花形歌舞伎「GOEMON 石川五右衛門」／2021年(写真提供:株式会社LAKインターナショナル)



「三谷かぶき 月光露針路日本 風雲児たち」(左が愛之助さん) 2019年(写真提供:松竹株式会社)

シネマ歌舞伎「三谷かぶき 月光露針路日本 風雲児たち」2022年8月12日(金)～8月18日(木) なんばパークスシネマほか全国にて上映(製作・配給:松竹)



大阪松竹座

▲大阪松竹座の前で展示された「道頓堀負けへんで!アートギャラリー!」のお披露目式／2020年

伝統芸能である歌舞伎には、成駒屋さんには成駒屋さんの、うちなら松嶋屋、片岡家に伝わる家の「型」があります。それを後世に伝承することは絶対にしなければいけません。それが歌舞伎俳優としての大前提です。大前提を踏まえた上で、例えば三谷幸喜さん作の「三谷かぶき」や漫画「ONE PIECE」、『NARUTO-ナルト-』など、新しい演目を生み出しています。私たちが手掛けた『GOEMON 石川五右衛門』*2 という演目では、歌舞伎×フラメンコをコンセプトに、歌舞伎俳優ではない今井翼くんにも舞台上に立ってもらっています。

実は歌舞伎は、今も昔も「現代劇」なんです。歌舞伎俳優はかつらをかぶって演じていますが、江戸時代はこれが普段のヘアスタイルだったわけです。近松門左衛門は心中があったと耳にすれば、「どうした、どうした」って聞き回って台本を書いたように、歌舞伎は当時のワイドショー的なお芝居で、高尚芸術ではなく、庶民の娯楽なんです。それが100年200年と時代を経て、今は伝統芸能といわれる古典になりました。



▲弟子たちに基礎稽古をつける様子を再現

そもそも出雲の阿国という人物が1603(慶長8)年にかぶき踊りを始めた時、「あの人たち、傾いているよね」と噂されたところから歌舞伎が始まりました。ですから、時代の最先端で「傾いていること」をしている人たちが「傾奇者」であって「歌舞伎」なんです。私たちが今やっている歌舞伎がさらに100年、200年経つと古典になっているかもしれません。そのような作品を残すことも、歌舞伎俳優の使命だと思っています。明日、未来へとつながっていくと思

いながら、新しい作品を創作しています。

そしてご存知のとおり、歌舞伎は大阪・上方の発祥です。義太夫も文楽も上方のもので、それが江戸へと下ったわけですが、今では歌舞伎といえば「銀座の歌舞伎座?」と多くの方がイメージされますよね。私個人の意見としては、とても悔しい。私は祖父・十三代目片岡仁左衛門、師匠である父・片岡秀太郎の背中を見て育ってまいりました。十三代目は京都に居を構え、父は関西大学にほど近い千里山に居を構えています。私も上方に居を構え、あくまでも東京は出張で行っているというスタンスで、これを貫いてこそ、上方歌舞伎を全うできるのではと考えています。今回、関西大学さんから客員教授のお話をいただき、同じ上方ですからありがたく思っています。

*2 『GOEMON 石川五右衛門』大泥棒・石川五右衛門が実は赤毛でスペイン人の血を引いているという奇抜な設定の新作歌舞伎。2011年、徳島県・大塚国際美術館「システィナ歌舞伎」で、主演・片岡愛之助さんで初演され、その後も東京・大阪で再演を重ねる人気作。

◆幼少期に感じた“好き”が、今に続いている

前田 愛之助さんの半生、歌舞伎に対する思いをお伺いし、子供の頃から歌舞伎に魅せられてというお話には、私たち研究者と通ずるところがあると感じました。本学には約800人の専任教員がおり、それぞれが専門の研究領域を持っています。私は人工知能、ニューラルネットワークが専門です。なぜ研究しているのかと聞いたら、やっぱり好きで、面白くて、何時間でも没頭できるからです。

愛之助 いつからお好きだったんでしょうか?

前田 私も小学校の高学年から中学生の頃です。ラジオや無線が好きで、海外の放送を聴くことが楽しく、一体どんな仕組みで受信できるんだろう?と興味を持ち始めました。それが今の仕事につながっています。

■対談



ある程度、型が決まっています。演目に応じて、物語に合わせて臨機応変に変えていきます。教えるものではなく、先輩のお芝居を観て盗むんです。盗んだものを体現できるのは、稽古しているからこそ。だから、日々の修行・精進が大事なんです。

(愛之助)

片岡 愛之助——かたおか あいのすけ
 ■1972年大阪府堺市生まれ。1981年十三代目片岡仁左衛門の部屋となり、「勳進帳」の太刀持で片岡千代丸を名のり初舞台。1992年片岡秀太郎の養子となり、六代目片岡愛之助を襲名。歌舞伎以外の活躍も目まぐるしく、主な出演作にドラマ「半沢直樹」「鎌倉殿の13人」、映画「七つの会議」などがある。2008年三代目榎茂都扇性を襲名、上方舞の榎茂都流四世家元を継承。著書に「愛之助日和」(光文社)などがある。堺市親善大使。2022年度関西大学客員教授。

傾くということは、変えるということですね。その時代にはないもの、新しいものを作り出していく。そして時代が変わり、伝統になる。伝統になるけれど、そこで止まるのではなく、さらに変化を続けていくという、歌舞伎の本質をお話の中から知ることができました。

研究・教育の世界も全く一緒に、まだ明らかにされていない分野を探究したいとか、今とは違うものを生み出したいという思いがないと、未来につながりません。

先日、大学院博士号の学位授与式がありまして、授与される皆さんに「皆さんは博士号を取得するという成果をあげましたが、研究に終わりはありません。今が始まりであって、研究は永遠に続きます。これが今お渡しした学位記の意味です」とお話ししました。

愛之助 私たちも先輩方から言われました。正解も終わりもない。だから一生、精進、修行だ。

◆変化する学び。次世代の大学教育

前田 大学教育も新しい時代に対応し、どんどん変化しており、本学でもDXによる次世代の教育システムを導入しています。その

一例として、セミナー、授業の動画をご覧ください。2022年2月に実施した「Kansai University Business Camp 2021」というオンラインプログラムと遠隔授業の様子で、VirbelaとZoomというアプリケーションを併用し、海外の学生と関大生がリモートで協働しながらビジネスプランを作成したり、授業を受けています。愛之助 大学の授業には憧れもあります。これは想像していたものと違って、ずいぶん自由な雰囲気ですね。



前田 ご覧いただいたこの次世代型のプログラムでは、仮想空間で教員も学生もコミュニケーションを取ります。アバターで自分を表現し、その世界への没入感を利用することで、少し内気な人がアクティブになれたり、時間的・空間的な制約をなくすことで、より活発なディスカッションを期待することができます。

複雑化する時代、授業だけではなく、大学教育全体がいろいろな意味で変わっていかないとはいけません。歌舞伎は伝統を守りつつ、新しいものを取り入れ、それをビジネスベースでも成立させています。分野は異なりますが、学ぶべきものがあると感じています。

◆芸は盗め。引き出しの多さが役の幅を広げる

前田 ところで、私は電気系の研究者ですので妙な質問になるかもしれませんが、一つのお芝居を作り上げる時は、それぞれの役者が稽古で身に付けてきた所作を組み合わせて、作り上げるのでしょうか？つまり機械に例えると、それぞれの部品としての所作を組み立てて出来上がるのか、それとも演目ごとに固有の所作や段取りを毎度身に付けて舞台に臨むのでしょうか？

愛之助 それは両方ですね。基本の動きを分かった上で、応用するという事です。そのためには、引き出しをいくつ持っているかが重要です。強い二枚目、弱い二枚目、敵役、隈取りをした人間、化け物など、多様な役を演じる引き出しを持っていないといけません。歌舞伎の場合、それぞれの役には決まりごとがあり、ある程度の型が決まっています。演目に応じて引き出しを開け、その物語に合わせて臨機応変に変えていきます。

その引き出しをどうやって増やすのかというと、誰かに教えてもらうのではなく、先輩のお芝居を観て盗むんです。芸はいくら盗んでも罪にならないから盗みなさいと言われるんです。ただし、盗んだものを自分自身で体現できるのは、稽古しているからこそ。だから、日々の修行・精進が大事なんです。

◆自分の個性を「型」で表現

愛之助 江戸歌舞伎は型を重視しますので、九代目市川團十郎が作った型で、ここは左足からとなれば、必ず左足から決まっています。対して、上方歌舞伎は型がないと言われていました。この「型がない」という表現では、自由にやっているから型がないと思われるかもしれませんが、細かく見ると、これは仁左衛門の型、これは愛之助の型と、役者が個性を生かして作った型が存在しているのです。



前田 研究者の世界でも、一つのテーマを深く熱心に追求していると、個性を認めてもらえ、学会でも一目置かれるようになります。ただ、我々の世界では、他の人の研究を盗むことはできません(笑) 愛之助 私たちは師匠から教わった時、ともかく最初は教わったことをそのまま再現しないとはいけません。しかし、再び演じる時に、そこに自分の考えがあれば、師匠は左足から出したけれど、自分は右足を出そうと、型を変えてもいいわけです。ただ、人それぞれ好みがあり難しい世界ですので、思い付きで変えるのではなく、やはり確固たる裏付けが必要ですね。

◆自信を持って世界に発信する上方歌舞伎

前田 本日は本当にいろいろなお話を聞かせていただきました。最後に今後の抱負をお聞かせください。

愛之助 やはり私は上方歌舞伎の一端を担っていく者として、上方歌舞伎の魅力をもっと皆さまに知っていただきたい。そして、歌舞伎自体をご覧になられていない方々、特に若い方に観ていただき、自信を持って「我が国にはこういう文化がある」と世界に発信してもらいたいですね。

さらに大きな夢としては、上方といわれる地域で、今は大阪松竹座、来月は豊岡市の永楽館というように、毎月どこかで必ず歌舞伎が上演されているような時代が来てほしいと願っています。

私は例年10月に松竹座で1か月ほど公演を打ちますが、次の公演では、全く見たことのない、新しい歌舞伎をお披露目します。歌舞伎ってこんなに分かりやすかったのか、こんなに面白かったのかと、学生の皆さんにもきくと楽しんでいただけるものになると思います。

前田 国際部では留学生に日本文化を体験してもらいイベントなども実施していますが、ぜひ留学生にも観ていただきたいですね。

愛之助 劇場ではイヤホンガイドを利用させていただくと、作中の人間関係から、衣装やかつら、その場面の見どころなどをタイムリーに説明してくれるのでおすすめです。もちろん英語版もあります。

前田 歌舞伎にはさまざまな楽しみ方があるのですね。本学で客員教授としてお話いただけることを、改めて光栄に感じています。

愛之助さんの今を変える、次代につなぐというエネルギーは今の日本社会にも必要なことですね。ぜひ学生たちにその思いを伝えていただきたいです。

愛之助 頑張らせていただきます。

複雑化する時代、授業だけではなく、大学教育全体がいろいろな意味で変わっていかないとはいけません。歌舞伎は伝統を守りつつ、新しいものを取り入れ、それをビジネスベースでも成立させています。分野は異なりますが、学ぶべきものがあると感じています。

(前田)



前田 裕——まえだ ゆたか
 ■1956年大阪府大阪市生まれ。1979年大阪府立大学工学部卒業。1981年大阪府立大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程修了。1979年大阪府立高等学校教諭。1988年関西大学に着任し、2002年工学部教授。2008年システム理工学部長、2009年大学院理工学研究科長を歴任し、2012年副学長。2020年10月より現職。公益財団法人関西生産性本部理事。特定非営利活動法人大学コンソーシアム大阪副理事長。財団法人大阪科学技術センター参与。

■大学昇格 100年記念特集

Kansai University is celebrating its University Status Centenary in 2022



関西大学は2022年6月5日に 大学昇格 100年を迎えます

大阪初の私立大学として大阪・関西とともに

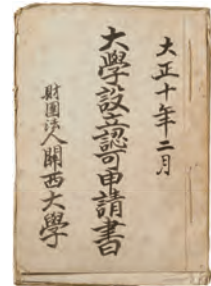
関西大学の前身である関西法律学校は1886(明治19)年11月4日、大阪西区京町堀の願宗寺で開校しました。その後、私立関西大学と改組・改称し、校地も大阪市北区上福島に移転しました。

その当時の日本には、大学と言えば国立の帝国大学しか存在せず、名称は「私立関西大学」としながらも専門学校令に基づく私立の専門学校でした。

しかし、1918(大正7)年、公立大学や私立大学の設置を認める大学令が公布されたことを機に、総理事・山岡順太郎のリーダーシップのもと、関西財界や各方面からの支援を得て、1922(大正11)年6月5日、関西大学は大阪初の私立大学に昇格しました。

1922年は関西大学にとって、大学昇格をはじめ、千里山学舎(キャンパス)の開設、本学の教育理念である学是「学の実化」の提唱、学歌(作詞:服部嘉香、作曲:山田耕筰)の制定など、関西大学の礎が築かれた、まさに画期となる1年でした。

それから100年。2025年の「大阪・関西万博」に向け、より注目が集まることが期待される関西圏に立地する関西大学は、これからも教育、研究、社会連携を通して、更なる発展を目指しています。



Top Message

大学昇格 100年を祝して

●学校法人関西大学 理事長 芝井 敬司



今から100年前の1922(大正11)年6月5日に、関西大学が生まれました。すでに1905(明治38)年から「私立関西大学」を称していた本学でしたが、今回は大学令による正式の大学昇格です。十分な基本財産を集め、吹田市千里山に新キャンパスを拓き、法学部と商学部の2学部で優れた教授陣を招聘して、ようやく本学の申請が認められました。

大学昇格運動を主導したのは山岡順太郎でした。山岡は大阪商業会議所会頭を務めた経済界の重鎮でしたが、本学のリーダーに転じると、大学昇格に伴う寄付金募集、千里山校地の選定と開設、そして何よりも本学を牽引する理念「学の実化」の提唱に力を注ぎました。

山岡順太郎が提唱した学是「学の実化」とは、「学理と実際の調和」を意味しています。そして、この「学理と実際の調和」に、「国際的精神の涵養」「外国語学習の必要」「体育の奨励」を加えた教学の4本柱が、爾来、私たち関西大学のあり方を支えてきました。4つの柱は、それぞれが本学の目指すべき教育の指針であるとともに、私たちが大学教育を通じて育成したいと考える人材像そのものです。そしてまたそれは、単なる教育

の指針や目標を超えて、関西大学とは何であるのかを明らかにするという意味において、私たち関西大学の存在理由、存在の根拠です。

昇格100年は、大学昇格からの時の経過を、指を折って数える作業ではありません。本学の中興の祖たる山岡順太郎のリーダーシップの下に、私たち関西大学が大正期に新構想の大学として出発したことの意義を、ここに再確認する機会として生かす必要があります。

大学昇格100年を記念して6月5日には記念式典やシンポジウムが実施され、1年間で見れば「学の実化講座」や「山岡塾」、記念誌の作成と記念展示や校友会が主催する記念フェスティバルなど、各種の昇格記念行事が企画・準備されています。こうした行事と事業を通じて、大学昇格の意義を、深く尋ね再発見する機会としなくてはなりません。

関西大学の教職員、学生をはじめ、校友会や教育後援会等の関係団体のみならず、本学に関わるすべての人びとにとって、本年が意義ある一年になることを心より期待する次第です。

新しいことに挑戦し、変化し続けること ●関西大学 学長 前田 裕



関西大学は、2022年6月5日の佳節に、大学昇格、学是である「学の実化」、学歌、そして、千里山学舎の100周年を迎えます。山岡順太郎先生をはじめ、多くの諸先輩方に、大学昇格に際して信念をもって奮闘いただきました。その労をもって、今の関西大学があることに深謝いたします。

それから100年の間の、多くの卒業生の力、関西大学の教育・研究や社会との繋がりを高めるための先達の努力、関西大学に携わった多くの皆様のご尽力を礎に、現在の関西大学があります。

今、社会はますます難しい時代に向かっています。日本を見ても、少子高齢化や格差の拡大、産業構造の変容など、深刻にとらえなければならない課題が山積しています。世界に目を向けてもSDGsに代表される多くの課題が示されています。その解決のためには、高度な知識や技能をもつと共に、一人ひとりが知恵を出し合っ、お互いを尊重しながら協力できる人材の育成が極めて重要です。

「学の実化」はまさに、この社会の変容を予想したかのように、「学理と実際の調和」を謳っています。大学の教育が、変化する社会との相互作用でしか成り立たないことを予測していました。

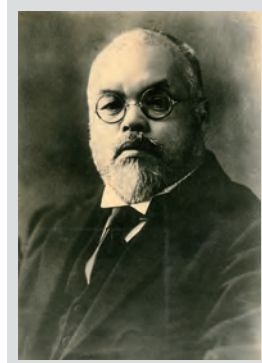
次の100年をどのように作るのかは、私たちに委ねられています。混沌と不確実性の時代に、節目の年を迎える関西大学にとって、次の世代に何を伝えるのか、何を残すのか問われています。変化を続ける社会で新たな展開、発展の礎を築くには、新しいことに挑戦し、自分自身が変化し続けることです。そのような姿勢を世に問うことで、社会からのフィードバックを受けて、更なる変化を求める。関西大学のこのようなスパイラルアップが、現代の私たちの「学の実化」ではないでしょうか。

そして我々の次の世代は自分たちの関西大学を作る、その責任は彼らに委ねられています。次の世代に自信をもってバトンタッチできるように、そして、そのバトンを受けた次の世代が、その次へとつないでいく、時間を越えた「ひとつの関西大学」が作られることでしょう。

100周年を迎える佳節に、先達への感謝を込めて、そして次の世代への願いを込めて、関西大学の来し方行く末に敬意を表したいと思います。

●「学の実化」の提唱

山岡順太郎総理事は、大学昇格後の新しい関西大学を築き上げていく中で、大学は実社会の知識や経験を取り入れ、社会は大学の学術研究の成果を取り入れることによって、学理と実際の調和を求める「学の実化(がくのじつけ)」を提唱。当時の関西財界の重鎮で、実業家でもあった山岡総理事ならではの経験を背景にした教育理念は、100年経った現在も本学の学是として良き指針となっています。



関西大学中興の祖・山岡順太郎

●学歌の制定

現在の学歌は実は2代目。初代の学歌も当時の学生たちに親しまれていました。しかし、千里山学舎や新しい関西大学の理念を謳った学歌が求められようになり、本学講師(後に教授)の服部嘉香に作詞を、その知人で、当時の音楽界で異彩を放っていた山田耕筰に作曲を依頼し、1922年9月に現在の学歌が完成しました。



服部嘉香 山田耕筰

●千里山学舎の開設

大学昇格を目指し、手狭になった福島学舎に代わる広大な校地を探していた当時は、北大阪電気鉄道株式会社(当時)が路線を千里山駅まで延伸しようとしていたところ。通学の足が確保されることから、同社設立者の一人で、関西大学の評議員でもあった大鐘彦市が千里山を推薦し、新たな校地に決定しました。その広さは福島学舎の約15倍。そこに、まず予科校舎が完成しました。



1923年竣工の正門(現在の以文館下の坂道)



昭和初期の千里山学舎(航空写真)

その後、大学の発展とともに、少しずつ敷地を拡張、校舎や施設が整備され、現在の千里山キャンパスの原型が形作られてきました。1928(昭和3)年に竣工した図書館(現簡文館)は、当時を偲ぶことのできる唯一現存する建物として世代を超えて愛されています。

大学昇格 100年記念特集

大学昇格 100年記念事業等

記念式典およびシンポジウム

日程 2022年6月5日(日) 10:00~12:30
場所 千里山キャンパス 第2学舎4号館 BIG ホール100

①式典—10:00~10:20
 ・学歌(100年の歴史紹介、作曲家・山田耕作が歌唱、録音したSPレコード鑑賞)
 ・主催者挨拶 芝井敬司(学校法人関西大学理事長) 前田裕(関西大学学長)

②シンポジウム—10:30~12:30
 〈テーマ〉「大大阪の誕生と旧制関西大学の出発—山岡順太郎と学の実化—」
 〈司会・コーディネーター〉市原靖久氏(法学部教授)
 〈基調講演〉橋爪紳也氏(大阪公立大学研究推進機構特別教授・同観光産業戦略研究所長)
 〈パネルディスカッション〉
 橋爪紳也氏、藪田貴氏(名誉教授・兵庫県立歴史博物館館長)、官田光史氏(文学部准教授)、橋寺知子氏(環境都市工学部准教授)、熊博毅氏(元年史編集室職員・学芸員)

※ライブ配信およびアーカイブ配信(6月8日~30日)を行います。大学昇格100年記念特設サイトからご覧ください。

「学の実化」講座

「学の実化」提唱から100年を迎えるにあたり、「学理と実際の調和」という本学の理念を現代社会に問う、「学の実化」講座(全5回)を開催しています。第一線で活躍する著名人を講師として迎え、講師による講演のあと、講演テーマについて講師と参加者でディスカッションする対話方式の構成となっています。

回	日時	講師
第1回	3月16日(水) 13:00~14:30	●國部毅氏(三井住友フィナンシャルグループ取締役会長)
第2回	5月11日(水) 14:40~16:10	●江連裕子氏(セント・フォース所属経済キャスター)
第3回	7月6日(水) 14:40~16:10	●山川景子氏(イヴレス株式会社代表取締役/CEO)
第4回	9月28日(水) 13:00~14:30	●玉岡かおる氏(作家、大阪芸術大学教授)
第5回	11月30日(水) 13:00~14:30	●大坪文雄氏(バネソニックホールディングス株式会社特別顧問)

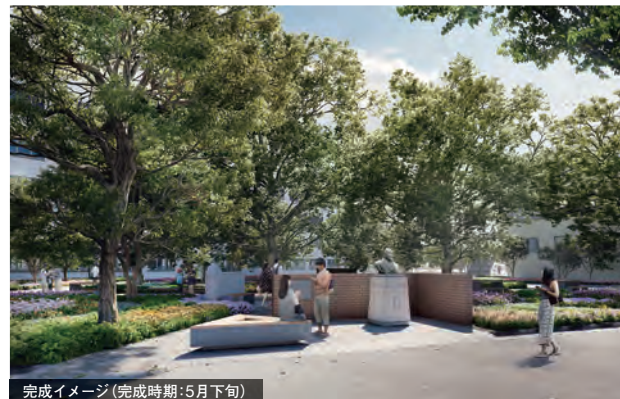
定員 対面：50名、オンライン：250名
 〈本学学部生・大学院生・併設校生徒〉
 —対面・オンラインともに申込可
 〈校友・卒業生、在校生・卒業生父母、教職員、一般〉
 —オンラインのみ申込可

申込方法 大学昇格100年記念特設サイト・「学の実化」講座の各回申込フォームより、お申込みください。

※受講無料、事前申込要(先着順。定員に達し次第受付終了)

キャンパス整備事業

山岡順太郎の胸像および第2学舎1号館前の広場を整備



完成イメージ(完成時期:5月下旬)

山岡順太郎の胸像および豫科青春の像がある第2学舎1号館前広場は、千里山キャンパス正門そばにある大学の顔となる位置にあり、千里山キャンパス内でも有数の広さを持つ緑地広場。

山岡順太郎像と青春の像の間を小道で結び、学生の動線として有効に活用できるように、また移動中の散策も楽しむことができるような広場へ整備しています。

像のそばにも立ち寄ることができ、その周辺には、一息つける休憩スペースも設置。ベンチからの風景も楽しめるよう、植栽に工夫を凝らし、一体感のある空間づくりを演出します。



(左)山岡順太郎胸像 (右)豫科青春の像

「山岡塾」の創設

学園の理念(学是)である「学の実化」を具現化する新たな試みとして、「山岡塾」を創設します。山岡塾の塾生は、正課外の活動として、経済の活性化や地方創生、DX・AIの活用、SDGsの推進などの社会的課題の解決に向けてチームで取り組みます。1チームごとに最大100万円の活動資金が提供される他、本学教職員や校友等からの助言を得ながら活動に取り組みます。

対象 本学の学部生・大学院生、卒業・修了生(3年目まで) 併設高等学校の生徒

募集人数 30名程度(5~6チームを編成予定)

活動期間 2022年8月下旬~2023年3月下旬

選考方法 書類選考および面接選考

応募期間 2022年6月6日(月)~6月30日(木)

応募方法 大学昇格100年記念特設サイト・山岡塾「2022年度塾生募集」からご応募ください。



記念展示会・年史資料展示室企画展

記念展示会「真理の討究 学の実化」

大学昇格前後の関西大学のあゆみ、大学昇格に尽力した山岡順太郎総理事をテーマに、記念展示会「真理の討究 学の実化」を開催しています。山岡順太郎の事績や千里山学舎の開設、学歌の制定、当時の学生生活などを資料や写真パネル、映像で紹介しています。

日程 4月1日~6月30日(木) 10:00~16:00(入館は15:30まで)
場所 千里山キャンパス 関西大学博物館(簡文館) 特別展示室

年史資料展示室企画展「山岡順太郎の書と言葉」

日程 4月1日~10月10日(月・祝) 10:00~16:00(入館は15:30まで)
場所 千里山キャンパス 簡文館1階 年史資料展示室
展示内容 山岡順太郎総理事の書や手紙など

記念映像を公開

関西大学が大学に昇格した頃のキャンパス風景や学生生活を記録した貴重な映像を再編集し、公開しています。



- 1 昭和初期の関西大学 ①千里山学舎**……1928年から1931年頃の間に撮影された千里山キャンパスの映像です。
- 2 昭和初期の関西大学 ②天六学舎**……1929年から1935年頃の間に撮影された天六学舎(1929年~2014年)の映像です。
- 3 今も残る村野藤吾の建築**……日本建築界の偉才・村野藤吾は、1940年代後半から約30年にわたって千里山キャンパスの学舎を設計。現存している建物を紹介しています。
- 4 運動競技**……昭和初期に撮影されたラグビー、相撲、卓球、陸上競技、柔道、馬術、スキー、漕艇、野球の練習や試合の様子映像です。
- 5 北村兼子 SPレコード「怪貞操」**……関西大学最初の女子学生・北村兼子は、在学中から新聞記者の傍ら文筆活動も行い、1927年に『怪貞操』(改善社)と同名のSPレコード(日東蓄音器)を出しました。映像では北村兼子の貴重な肉声を聴くことができます。

スタンプラリーを開催

千里山キャンパス内の大学昇格にまつわる6つのスポットを巡るスタンプラリーを開催しています。専用アプリでスタンプを6つ集め、パズルを完成させると、ゴールの関西大学博物館にてノベルティを進呈します。

日程 4月1日~10月10日(月・祝)
場所 千里山キャンパス
 6つのスポット▶①山岡順太郎像、②大運動場を偲ぶ記念碑、③旧正門、④景観回顧モニュメント「グラウンドとクラブハウスのあった景観」、⑤学歌、⑥旧図書館
 ※ノベルティはなくなり次第終了

大学昇格100年記念誌

1922(大正11)年から1936(昭和11)年を中心に、大学昇格前後の関西大学のあゆみを『学の実化 大学昇格・千里山学舎開設100年記念誌』として編集しました。
 ※内容は式典終了後より公開します。



関西大学フェスティバルin関西

関西大学校友会がオール関大およびそのファミリーが集う場として、毎年全国各地で開催する関西大学フェスティバル。今年が大学昇格100年を記念して、千里山キャンパスで開催します。

大学昇格100年記念・関西大学フェスティバルin関西

日程 10月9日(日)および10月10日(月・祝)
場所 千里山キャンパス

▼Day1 10月9日(日)
 10:30 — オープニングセレモニー
 11:00~16:00 — 各種イベント(著名人・学生団体ステージ、関大グルメフェス、まちFUNまつり、学内施設見学など)

▼Day2 10月10日(月・祝)
大学昇格100年記念2022年度校友総会
 〈第1部〉12:00~13:30 — 総会
 〈第2部〉14:00~15:30 — 記念講演(講師未定)
 〈第3部〉16:00~17:00 — 懇親会
 ※詳細は、校友会機関誌『関大』および校友会ウェブサイト、SNS(Facebook、LINE)にて告知予定

大学昇格100年記念特設サイト

各行事・イベント等の詳細・申込方法は、大学昇格100年記念特設サイトからご確認ください。



■大学昇格 100年記念特集

創立時から大学昇格まで

——市原靖久法学部教授に聞く

関西大学の前身である関西法律学校は、1886(明治19)年11月4日、東京以外では初の法律学校として大阪西区京町堀に設立されました。改めて、設立当時の状況や大学昇格の経緯について、当時の歴史に詳しい法学部の市原靖久教授に聞きました。



●ポアソナードの教え子らが設立

関西法律学校の設立の経緯を尋ねると、市原教授は「幕藩体制の下では近代的な法律がありませんでした。明治政府は、治外法権を撤廃して外国人に対する裁判権を持つためにも、法制度を近代化する必要があったのです」と説明を始めました。モデルとしたのは、当時、法制度が最も整備されていたフランス法です。司法省に設置された法学校で、1873(明治6)年から、フランス人法学者ポアソナードによる教育が開始されました。

市原：「初期の裁判官や検察官は、司法省法学校で教育を受けた人たちが占めます。ポアソナードは常々、教え子たちに法学教育の重要性を説いていました。その教え子たちが、関西法律学校の創立者となります」



●ポアソナード

ギユスターヴ・エミール・ポアソナード・フォンタラビー(1825-1910)。フランス人法学者。パリ大学で教鞭をとっていたところ、明治政府に招かれて来日。刑法や治罪法(後の刑事訴訟法)、民法を起草するなど法典編纂に携わる一方、司法省法学校で司法官の育成に尽力した。1889(明治22)年4月29日、一時帰国の途中に関西法律学校を訪れた。

きっかけとなったのは、創立前年に発生した「大阪事件」です。

●大阪事件 1885(明治18)年11月、自由党左派の大井憲太郎らが朝鮮の独立支援を企てるも、事前に発覚して大阪などで多数が逮捕された事件。

市原：「外患罪を適用する大きな事件です。大阪控訴院に臨時重罪裁判所が設置され、日本を代表する優秀な裁判官や検察官が送られてきました。そして、大阪にも若者が法律学を学べる学校を作ろうという機運が盛り上がりしました」

当時、東京には私立の法律学校が複数設置されていたものの、大阪にはなかったのです。1886(明治19)年11月、自由民権運動家の吉田一士ほか計12人の合議により関西法律学校が創立されました。大阪西区京町堀の願宗寺を間借りしてのスタートです。

●関西法律学校を創立した12人



- 井上 操 —— 大阪控訴院判事(講師)
- 小倉 久 —— 大阪控訴院検事(講師、初代校長)
- 堀田正忠 —— 大阪控訴院検事(講師)
- 志方 鍛 —— 大阪始審裁判所判事(講師)
- 鶴見守義 —— 大阪始審裁判所判事(講師、学監)
- 手塚太郎 —— 大阪始審裁判所判事(講師)
- 野村珍吉 —— 大阪始審裁判所検事(講師)
- 吉田一士 —— 自由民権運動家(校主)
- 有田徳一 —— 元大阪府官吏・退役軍人(第3代校長)
- 児島惟謙 —— 大阪控訴院長(名誉校員)
- 土居通夫 —— 実業家(名誉校員)
- 大島貞敏 —— 大阪始審裁判所長(名誉校員)

市原：「創立者の12人のうち7人はポアソナードの教育を受けた人たちを中心とする裁判官や検察官で、勤務が終わってからボランティアで講師を務めました。さらに、学校運営にあたる人たちが、法曹界や実業界から支援する人たちが協働して関西法律学校を創立しました。1人の力ではなく、12人のコラボというのがいかにも関西大学らしいと思います」

名誉校員の児島惟謙はこの後、大津事件で非常に有名になりました。土居通夫は大阪を代表する実業家で、後に大阪商業会議所の会頭を務めています。

●大津事件

1891(明治24)年、来日中のロシア皇太子ニコライ(後のニコライ2世)が滋賀県大津市で沿道警戒中の警察官に突然切りつけられた事件。大審院長の児島惟謙は死刑を望む政府の干渉を退け、罪刑法定主義と司法権の独立を守ったとされる。



大阪には適塾や懐徳堂、泊園書院など学問的な伝統もあります。地の利、人、そしてタイミングに恵まれ、関西法律学校は誕生したと言えます。

●学校の変遷



創立7年後の1893(明治26)年、東京以外に所在する学校として唯一、司法省指定学校に認可されました。卒業すると判事検事登用試験の受験資格が得られるため、青雲の志をい多く若者が多く入学しました。

1904(明治37)年には経済学科を新設し、総合大学への第一歩を踏み出します。「私立関西大学」に改称したのはその翌年でした。

市原：「ただ、法令上は専門学校の位置付けでした。当時は帝国大学だけが大学で、私立の専門学校は一定の要件を満たせば『大学』を名乗ってもいいとされていました」

関西法律学校は創立後、名称だけでなく校舎の場所も変えています。当初は講師の勤務地である裁判所に近い場所に、京都帝国大学の教員が講師に来てくれることになってからは、交通の便のいい福島に移転しています。

●校舎・学舎の変遷

- 1886年11月 —— 願宗寺(西区京町堀)
 - 1886年12月 —— 東区淡路町仮校舎
 - 1887年4月 —— 興正寺(北区河内町)
 - 1903年12月 —— 江戸堀校舎(西区江戸堀)
 - 1906年9月 —— 天王寺美術館仮校舎(南区天王寺)
 - 1906年12月 —— 福島学舎(北区上福島)
- ※1929年9月まで使用



▲願宗寺



▲(左)福島学舎(右)千里山学舎で最初に建設された予科校舎

- 1922年5月 —— 千里山学舎開設(1922年6月 大学設立認可)
- 1929年9月 —— 天六学舎開設

●大学昇格へ

1918(大正7)年の大学令制定で初めて、帝国大学以外にも公立大学や私立大学の設置が認められるようになりました。昇格条件として、「高等学校と同一水準の大学予科の開設」「一定額の基本財産の供託」「一定数の専任教員の雇用」などがありました。

市原：「基本財産は、1校につき50万円(現在の約2億7000万円相当)、1学部増すごとに10万円で、これがネックとなりました」

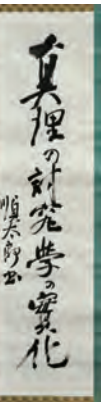
この問題は、当時、大阪商業会議所の会頭を務めていた山岡順太郎に評議員になってもらい、関西財界のバックアップを得ることで解決しました。山岡は関西大学の総理事に選任され、「学の実化」を教育理念として掲げます。

山岡は1922(大正11)年の大学昇格時に、「学理と実際の調和」と題する談話を「千里山学報」第2号に寄せています。

市原：「冒頭で、経済的に恵まれませんが向学の志を強く持つ青年に、専門の学問を修めて才能を発揮する機会を与える、というのが関西大学の特色だと言っています。ただ、その後続けて言います。今まではそうだったけれど、今後は昼間課程が設けられるので、最初から学問を志す学生のことも含んで新しい教育の理念を考えないといけない。それが学理と実際の調和なんだ、ということです」

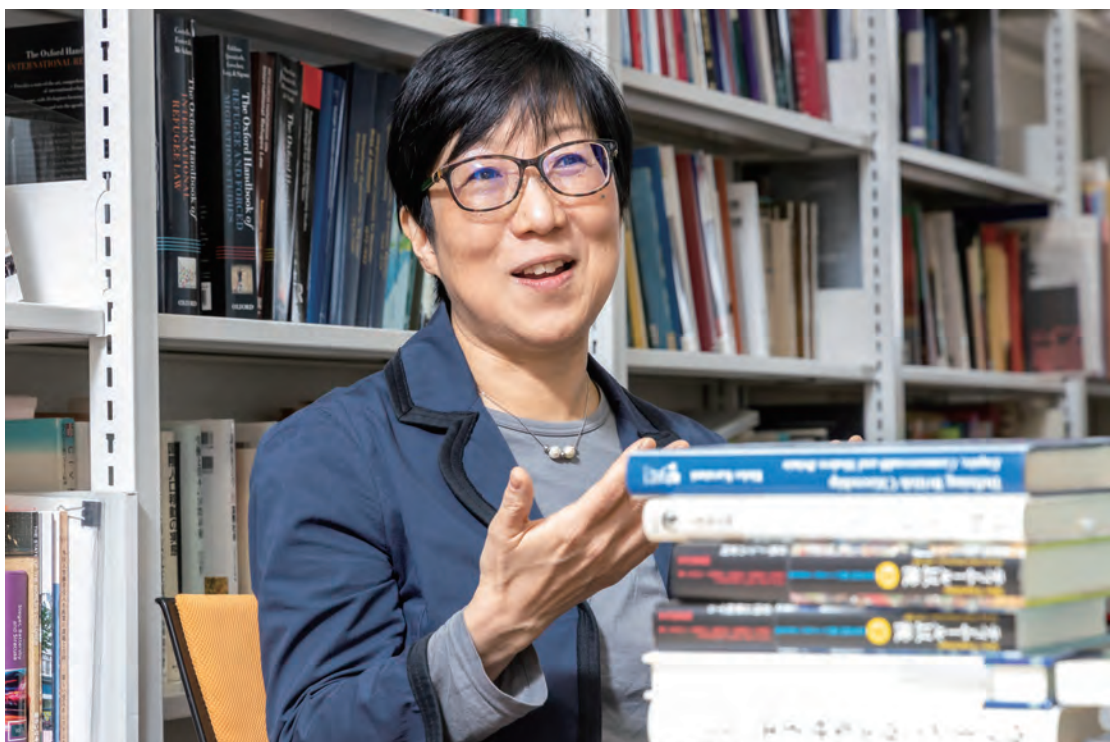
山岡順太郎揮毫「真理の探究 学の実化」(時期不明 個人蔵)

そうして掲げられた教育理念が、「学の実化」。こうして、関西法律学校として始まった関西大学は、大学昇格を機に現在の姿へと大きく転換しました。



研究最前線

国際関係論 • International Relations & International Politics



国境を越える移動から国際政治のさまざまな現象を考える

「移動」で世界を見る

Exploring Various Phenomena in International Politics Through the Lens of "Mobilities"

Viewing the World Through the lens of "Mobilities"

●政策創造学部 柄谷 利恵子 教授

• Faculty of Policy Studies —Professor *Rieko Karatani*

政策創造学部の柄谷利恵子教授は、「移動」という視点から国際社会を読み解く。その目がとらえるのは、人の移動だけでなく状況や情報などあらゆるものの移動であり、実際の移動に加えて想像上の移動や仮想上の移動も含まれる。

Professor Rieko Karatani of the Faculty of Policy Studies analyzes international politics from the perspective of mobilities. Through this perspective, we are able to study the role and meaning of not only the movement of people, but also the movement of goods, and information, in actual, imaginative and virtual worlds.



「移動と生存—国境を越える人々の政治学」(岩波書店 2016年)
「Defining British Citizenship: Empire, Commonwealth and Modern Britain」(Routledge 2003年)



「移動」を通じて国際社会の在り方を考える

—専門分野は何でしょうか。

国際関係論です。一般的に、日英関係のような国家と国家の関係を論じる学問だと思われることが多いのですが、私はそうではなく、「移動」を通じて国際社会や国家の在り方を考えることをテーマにしています。具体的には、帝国形成から解体期およびその後の英国を事例として、「国籍」、「シティズンシップ」、「移動」に関する政策を扱ってきました。また、人の移動に関する国際制度の変遷も研究対象です。

—「移動」というと？

移動する人や物、情報です。時間的な移動という意味で歴史的なことも含みます。

物理的な移動だけでなく、本や映画によってその場所の情報を得る想像上の移動や、インターネットを使ったオンライン会議のような仮想上の移動など多様です。

70年前に策定された難民条約

—具体的な研究内容を教えてください。

国境を越えて避難する人は、難民としてとらえられます。難民条約(難民の地位に関する条約)は1951年に当時の時代背景からできました。当時の議論が残る文書を読み解き、条約作成にかかわった人へのインタビューを実施して、条約が制定された過程を調査しました。

難民条約は「第2次世界大戦で生じた難民を保護しよう」という理念でできた政策ではありません。終戦期、戦場となったヨーロッパは荒廃していました。たくさんの人が戦地から戻ってくると、失業者であふれてしまいます。社会不安が再び高まり、また戦争が始まる恐れがあるので、今後生じる余剰人口をどうにかしようというところから難民条約の議論は始まったのです。

案として、余剰人口を世界中に分散し、移動する全員を移民として管理する国際機関をつくる考えがありました。しかし、新たな国際機関を設立する能力があった唯一の国、アメリカにとっては国益になりそうにありませんでした。結局、アメリカの意見が多く盛り込まれた、非常に厳密な小さな制度ができました。それが現在の難民条約の起源です。

70年前に定められた定義を、そのまま2022年の今日に当てはめているから、現状とかみ合わなくなります。難民条約の厳密な解釈だけでは、助けられる人が非常に少ない状況です。制度に関しても、作られた歴史的な背景や運用上で生じた変化を考慮しなければいけません。

Exploring the international politics through the perspective of mobilities

—What is your area of expertise?

I specialize in international relations and international politics. Generally, people tend to think of this field as a discipline that deals with the relationships between states, such as the relationship between Japan and the United Kingdom, but I've focused on increasing interconnections across borders in today's world through the lens of mobilities. Specifically, I have dealt with laws and policies regarding nationality, citizenship, and migration with a focus on the United Kingdom. My research covers the time from the forging of the empire to that of dissolving it and to the post-Brexit era. The evolution of international regimes on peoples on the move is also a subject of my research.

—What do you mean by "mobility"?

I'm referring to modern-day mobility that is characterized by the existence of various forms.

It refers to not only the physical movement of people in the actual world, but also the movement in the imaginative world through newspaper, television images, books and movies. In addition to these two forms, the movement in the virtual world via the internet has become indispensable in our everyday life. With diversified forms of mobilities available now, even if we remain in a single location in the actual world, we are indeed "on the move" in one way or another.

The Refugee Convention established 70 years ago

—Please tell me about the details of your research.

We assume that people who are forced to flee across state borders are considered refugees. In reality, the definition of a "refugee" is strictly determined by the Refugee Convention (Convention Relating to the Status of Refugees). It was established in 1951 through the process of negotiation and contestation among various stakeholders of the time. I investigated the process by which the Refugee Convention was enacted by reading archival materials and conducting interviews with those involved in its creation.

The Refugee Convention was not necessarily intended to protect all the World War II refugees. At the end of the war, Europe was economically and socially devastated with an enormous number of unemployed people. Governments in Europe were, in addition, urgently seeking a solution to absorb people returning from battlefields after the war. If a surplus population was left unattended, they feared that social unrest would rise, and war might once again break out.

Everyone agreed that the surplus population in Europe had to be dealt with, but disagreed how. One idea was to create an international organization that would protect the entire surplus population through international cooperation. However, the United States, the only country at that time that had the political and financial capacity, was opposed to establishing such an organization with broad mandates. The United States wanted a more practical organization that would not go against its national interests. We ended up with the international organization whose job was restricted to the legal protection of "refugees". That is how the current Refugee Convention came to be.

■研究最前線

■自分とは違う道が広がっていた外国人の友達

—「移動」を研究テーマにした経緯を教えてください。

きっかけは大学4年生の時です。私は英文学の学生で、通訳のアルバイトをしていました。就職先について話していると、日本で勉強をしていた香港の友達「カナダやオーストラリアにも親戚がいるし、その辺りでも考える」と言うし、イタリア人の友達は「EU加盟国ならどの国でも就職できる」と話していました。当時は1990年代。日本では海外での就職が一般的でなかった時代です。2人には、私とは違う道が広がっているのはなぜなんだろうと思いました。国境を越えた人の動きや、関連する制度に興味を持ち始めたのはそのころです。

そのような思いを抱きつつ、外資系の銀行に就職しました。1年間働いている間にやっぱり国際関係論を学びたいと思うようになり、退職して神戸大学法学部の3年次に編入学しました。所属したゼミが子どもの権利や外国人の権利を取り上げていて、興味深いと思い卒業論文で香港人の移動について書きました。それからずっと、移動をテーマに研究を続けています。

大学院の修士課程は上智大学に、博士課程はイギリスのオックスフォード大学に進学しました。自分も移動しながら研究をしてきました。

—研究する上で、どのような問題意識を持っていますか。

ありとあらゆるものが動いているんだ、ということですね。ルート(起源)とルート(経路)がありますが、私たちが生活する政治的共同体も国家もルートとルートの両方からできあがっているのに、血縁や土地といったルートを重要視する傾向が強いと感じます。しかし、どのように動いてきたかというルートも大切です。

特に政治学は、土地や国家にこだわりがちです。国家を「動かないもの」ととらえて理解しようとするのが普通になっています。しかし、国家は土地と国境だけでできあがっているのではなく、人という要素もあります。人はルートを背負って生き、歴史とともに流れていきます。

私が研究したいのは、動く人や物、状況や情報です。一般に、動かないことが「常態」で、動くことを「例外」だとみなして制度や法律が作られることが多いです。結果として、動くものをうまくとらえきれず、摩擦やひずみが生じ、こぼれ落ちる人ができてしまいます。そのような人にかに光を当てていくか。このことを考えていきたいですね。

■移民か難民か

—こぼれ落ちる人の例として、どのような人たちがいますか。

2016年ごろ、シリアや南スーダンから地中海を渡り、ヨーロッパに向かう人がたくさんいました。その途中、地中海で多くの人が亡くなっています。その人たちは移民か難民かという議論がありました。制度上、庇護申請をして初めて難民と認められるため、当初は移民と呼ばれていたんです。しかし、「移民危機」という報道を目にすると、経済的な理由で自分たちの職を奪いに不法な人がやってくるというイメージを持ってしまいます。このような認識と実態のずれを避けるため、フランスのル・モンド紙などは移民危機とは呼ばないようにするなどの対応をしました。

これは、移動する人々をどのように呼ぶかによって対応が変わる例の一つです。移民と呼ぶことによって、助けられない、もしくはネガティブな感情でとらえられてしまう人たちがいました。

—移動の手段は激しく進化しています。研究の重要性が増しますね。

物理的な移動手段もそうですし、インターネットの発展に伴って情報を移動させる技術も進んでいます。コロナ禍で、オンライン会議という新たな移動手段が浸透しました。激しく変化する中で、新たな手段に対応できる人と対応できない人に分かれています。財力や高い技術を持つ人はたやすく国境を越えて移動できますが、そうでない人はつらい思いをすることがあります。今後はさらに、動くものと動かない制度との間で生じるゆがみに焦点を当てて研究していきたいと考えています。



▲ 柄谷教授の専門演習風景 Seminar by Professor Karatani



The definition of "refugees" was established almost 70 years ago. Applied rigidly in 2022, it is not adaptable to our current circumstances. The increasing number of peoples who need care and protection today do not fit into a strict interpretation of the Refugee Convention. For example, according to the Convention, those people from a conflict zone are not defined as "refugees". In a globalized world with diversified forms of mobilities, we must consider that, as the circumstances which force people to flee change, so do the definition of "refugees" and the protection regime for "refugees".

■ Friends from abroad with different future paths unknown to me

— How did you come to choose "mobility" as the topic of your research?

It all started when I was a senior in college. I was a student of the English department, and I had been working part-time as an interpreter. When we were talking about job opportunities, my friends from Hong Kong who were studying in Japan told me they have relatives in Canada and Australia, so they were considering working in those countries, and my Italian friend told me that she could get a job in any EU member state. That was in the 1990's. It was a time when overseas employment was not common for Japanese people. I wondered why my friends from abroad had different paths that I did not have. It was around that time that I became interested in the movement of people across borders and the idea of mobility.

After graduating from a college, I found a job at a foreign-affiliated bank in Tokyo. After working there for a year, I decided that I wanted to study international relations, so I left and was admitted to the Faculty of Law at Kobe University as a third-year student. A seminar I attended covered children's rights and the rights of foreigners. I found it interesting and wrote about Hong Kong immigrants in London in my graduation thesis. Since then, I've been researching the subject of migration and mobility.

I went on to Sophia University for my master's degree and University of Oxford for my doctoral degree. I have conducted research while on the move myself, too.

— What are issues of interests you are pursuing while you conduct your research?

I take the perspective of "mobilities" as the key for understanding our world. It is said that we are influenced by our roots (origins) and routes (paths). I feel there is a strong tendency to place importance only on roots, such as blood relations and land, even though both the political communities and the states in which we live are formed on the basis of both roots and routes. We need to pay more attention to the implications of the routes, when we aim to understand how we live today.

In particular, the discipline of international relations tends to treat the states as rigid and static. It is common to regard them as something immobile. However, a state is not just made up of land and borders. It is also made up of people. People live with their routes and constitute history.

What I want to study are the diversified forms of mobilities and their roles and implications for our everyday life. As I said, people, goods, and information are all on the move, not only in the actual world, but also in the imaginative and the virtual worlds. In general, laws are often created under the assumption that immobility is the norm and that mobility is the exception. As a result, people may not be able to properly understand how mobility is utilized and what impact it brings upon our lives today. How do I shed a light upon the discrepancy between what is seen as immobile by law and what is actually mobile in today's world, taking the perspective of mobility into consideration? I want to continue engaging with this topic.

■ Immigrants or refugees?

— What are some examples of the discrepancy between the legal categories and the political world?

Around 2016, many people from Syria and South Sudan, for example, attempted to cross the Mediterranean Sea, heading for Europe. On the way, quite a few lost their lives in the Mediterranean. There was a heated debate about whether they were immigrants or refugees. According to the Refugee Convention, they are recognized as refugees only after applying for asylum, so they were called immigrants at first. When people in Europe read newspaper articles with the title of "immigration crisis", they pictured illegal people from the Middle East and Africa coming to steal their jobs for economic reasons. In reality, most of them would have been accepted as "refugees", once they had claimed asylum. Leading media companies such as the French newspaper Le Monde thus cautioned this gap between what people perceived and what reality was, and stopped calling it an "immigration crisis".

This is one example of how we respond differently depending on how we labeled people on the move. When they were labeled immigrants, they were immediately associated with illegality and perceived in a negative light.

— The means of mobilities are evolving dramatically. This makes your research all the more important, doesn't it?

Not only is this true for physical movement in the actual world, but the technology for information has also developed along with the Internet. Due to the COVID-19 crisis, online meetings have proliferated, and mobility in the virtual world has become indispensable. In a rapidly changing world, there are two types of people: those who can command the diversified forms of mobilities and those who cannot. Wealthier and more skilled people can easily move across borders in one way or another, but others may find it more difficult. In the future, I would like to focus my research on the strain that emerges between those people with a high-mobility-class position who can act like "mobility masters" and those with little skills on mobility who might end up like "mobility outcasts".

研究最前線

社会問題の多目的最適化による定式化 • Formulation of Social Problems in terms of Multi-objective Optimization

特異点論による パレート集合の構造の解明

企業とのプログラミングコンテスト開催による最適化アルゴリズムの開発

Elucidation of Structures of Pareto Set in terms of Singularity Theory

Development of Optimization Algorithm by Holding Programming Contests in Collaboration with Hitachi Ltd. and Hokkaido University

◎システム工学部 寺本 央准教授

• Faculty of Engineering Science — Associate Professor *Hiroshi Teramoto*

システム工学部の寺本央准教授は、数学的アプローチによる理論的枠組みの構築やアルゴリズムの開発に取り組み、学問の垣根にとらわれず、他分野への数理工学の応用を目指している。

Hiroshi Teramoto, an associate professor in the Faculty of Engineering Science, has been working on the development of theoretical frameworks and algorithms through a mathematical approach and applying them to various scientific fields.

諸科学分野で応用される、力学系理論と特異点論

— 専門分野について教えてください。

力学系理論と応用特異点論です。力学系理論というのは、ここでは物理で習う古典力学をイメージしてもらえたらと思います。天体の運動や分子の運動など複雑な力学の法則性を、微分方程式を用いて数学的アプローチで解明しようという学問です。応用特異点論とは文字通り特異点論を数学内外に應用することを目的とする分野です。高校で勉強する1変数関数の極小点、極大点等の導関数がゼロになる点がここでいう特異点の例ですが、より一般の多変数の写像に対しても写像のヤコビ行列の階数が最大でな

くなる点として特異点を定義することができます。最近では後者の応用特異点論を用い多目的最適化におけるパレート解全体の集合の数学的構造を研究しています。

多目的最適化は、制約条件下で複数の目的関数を同時に最適化しようとするものですが、一般には一つの目的関数の値を改善しようとする他の目的関数の値は改悪され、複数の目的関数を文字通り同時には最適化することができません。そこで多目的最適化においては、パレート解と呼ばれるある目的関数の値を改善するためには、少なくとも他の一つの目的関数の値を改悪せざるを得ないような解を考えます。パレート解は一般には複数あり得、状況に応じてパレート解の中から適切な解を選択する必要がありますが、適切な解を選び出すためには、可能な選択肢全体の集合であるパレート解全体の構造が分かっている必要があります。近年我々の研究により、パレート解集合全体の構造がどうなるかが、あるクラスの目的関数に対しては特異点論を使うことで解明されました。

— 特異点論を選ばれたきっかけは何だったのでしょうか。

特異点論の常套手段の一つに、幾何学的な対象に関する問題を代数の問題に帰着させて解くというのがありますが、一見とらえどころのない幾何学的対象に関する問題が、かっちりした代数の問題に帰着されるというところに興味を惹かれました。

また、ひとたび代数の問題に帰着されれば、計算代数等の手法を用いて、その問題を計算機で解ける場合もあります。計算機の力を使って人の手では到底解けなかった問題を解けるようになることにも魅力を感じました。



solid algebraic problem by using singularity theory.

Once a problem is reduced to an algebraic problem, it may be solved on a computer using methods such as computational algebra. I also find it fascinating to be able to use the power of computers to solve problems that could never be solved by human hands.

The Pareto set in a multi-objective optimization problem is also a subset of the singularity set on the map defined by the objective function, and it is possible to investigate the properties of the Pareto set by examining the singularity set of the map. Another reason I have continued this research is that there are various applications. I am also conducting joint research with companies on this theme.

— How has the research theme changed so far?

“Nature does not know the boundary of science.” are the words of Professor Kenichi Fukui, who was the first Asian recipient of the Nobel Prize in Chemistry in 1981 and the founder of theoretical chemistry in Japan. This is one of my favorite words.

Fields of specializations are boundaries created by people. We may miss big picture of natural or mathematical phenomena if we get caught in a specific field. For this reason, I have studied what I consider to be important from time to time, rather than focusing too much on a specific field.

However, research themes also come in and out of fashion, and these changes are especially intense these days. I wish to seek something invariant because we are in an age of rapid change, and I have chosen research themes that do not follow trends and that can solidify the foundation.

Application of the multi-objective optimization method to solve social problems

— What exactly is the methodology called multi-objective optimization?

A multi-objective optimization problem is, for example, a problem to find the mode of transportation to get to a city as quickly and cheaply as possible. In general, there is a trade-off relationship between speed and cheapness, and it is common to find that we arrive faster by plane but more cheaply if we take the train. In this case, the two objective functions are time and cost. For example, besides going by train or plane it is possible to go by bicycle, but if you go by bicycle, it is more expensive than going by train if you include the accommodation fee, etc. along the way. It also takes more time than going by plane, so going by bicycle cannot be a Pareto solution. A Pareto solution is in a sense a trade-off, a curve that expresses gaining something and losing something.

Although which mode of transportation should actually be used depends on the situation at the time, we need to know the overall structure of the Pareto solutions, which are a set of all possible choices, in order to select the appropriate solution for the situation.

— What kind of joint research are you conducting with corporations?

“Hitachi Hokudai Lab. & Hokkaido University Contest” is a programming contest co-sponsored by Hitachi, Ltd. and Hokkaido University. Kansai University also cooperates in creating the problems. In FY 2020, there were 1,700 participants from Japan and overseas. It is a contest that aims to devise clear evaluation criteria and algorithms for solving social issues that are becoming increasingly more complex, and so far we have set questions concerning pre-processing technologies for annealing machines, shopping support services, and spatio-temporal optimization technologies for regional energy systems, etc. They are problems of algorithms to derive the optimal solution, and what lies in the background is the multi-objective optimization described previously.

The algorithms developed through the contest are examined for practical application, and research results are presented at interna-

Dynamical system theory and singularity, which have many applications to various scientific fields

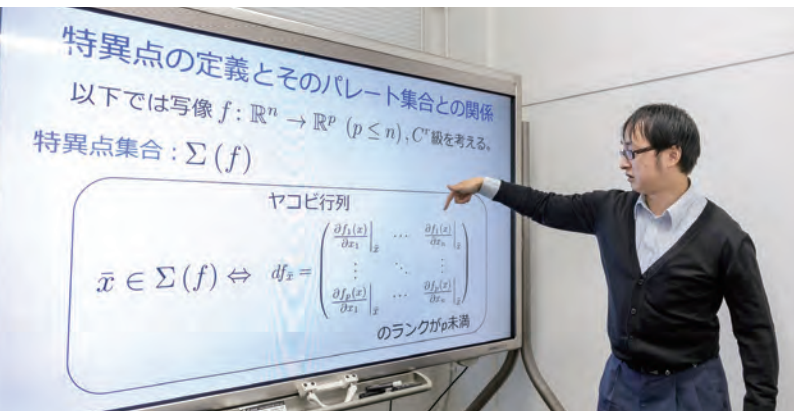
— What is your area of expertise?

The area I study is dynamical systems theory and applied singularity theory. Dynamical systems theory is to elucidate dynamics of various things ranging from small molecules to celestial bodies through a mathematical approach using differential equations. Applied singularity theory aims to apply singularity theory to various scientific fields. Singularity can mean different things to different fields of science. In the current context, the simplest example of singularity is a stationary point of a function, which can be generalized to that of a mapping. Recently, I have been working on mathematical structures of Pareto sets and fronts in multi-objective optimization problems by using singularity theory.

Multi-objective optimization is a field that attempts to optimize multiple objective functions simultaneously under certain constraints. However, in general, trying to optimize the value of one objective function results in a deterioration of the values of the other objective functions, and it is impossible to literally optimize multiple objective functions simultaneously. In multi-objective optimization, we therefore consider what is called the Pareto solution, which is the solution where the value of at least one other objective function must deteriorate in order to improve the value of a certain objective function. In general, there can be several Pareto solutions, and we need to select the appropriate solution from among the Pareto solutions depending on the situation. To do that appropriately, we need to know the overall structure of Pareto solutions. Our recent study elucidates the mathematical aspect of the overall structure of Pareto solutions for a certain class of multi-objective optimization problems.

— What made you choose this field of research?

One of the usual practices in singularity theory is to reduce problems in geometry to those in algebra. I am interested in the fact that a problem on a seemingly elusive geometric object can be reduced to a



▲特異点の定義とそのパレート集合との関係
Definition of singularity and its relation to the Pareto Set

■研究最前線

また、多目的最適化問題におけるパレート集合も、目的関数から定義される写像の特異点集合の部分集合となっており、写像の特異点集合を調べることで、パレート集合の性質を調べることもできるなど、さまざまな応用があるのもこの研究が続けてきた理由です。そのテーマで企業と共同研究も行っています。

—これまで研究テーマはどのように変わってきたのですか。

「自然は学問の垣根を知らない」というのは、1981年にアジアで初めてノーベル化学賞を受賞し、日本の理論化学の祖である福井謙一先生の言葉で、私が好きな言葉のうちの一つです。

専門分野というものは、人が作った垣根のようなものだと思いますが、自然はそのような人の勝手な都合に付度することは決してないため、専門分野にとらわれてしまうと、自然現象あるいは数学的現象の大局を見失う危険性があります。そのような理由から、あまり特定の専門分野にとらわれることなく、その時々で自分が重要だと考えることを研究してきました。

ただ、研究テーマにも流行り廃りがあり、特に最近ではその変化が激しくなっています。変化が激しい時代だからこそ、できるだけ不変なものを求めたいという思いがあり、流行りに流されず、堅実に一歩ずつ基盤を固めていけるような研究テーマを選んできました。

■社会課題解決に向けて、多目的最適化手法を応用

—多目的最適化とは、どういった方法論でしょうか。

多目的最適化問題とは、例えばどこかの都市までできるだけ早くかつ安く行く交通手段を求める問題ですが、一般には早さと安さにはトレードオフの関係があり、飛行機で行く方が早く着くけど、電車で行く方が安いという状況はよくあると思います。この

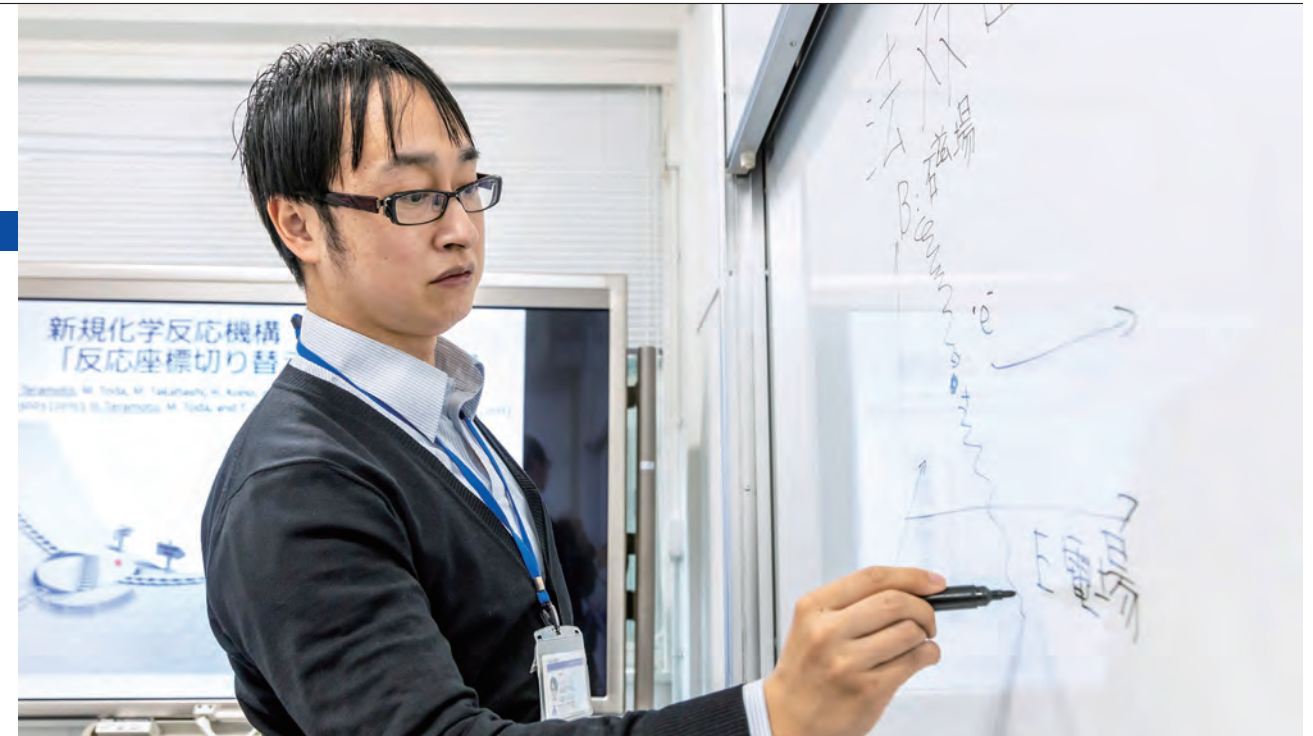
イメージが、多目的最適化の端的な問題です。この場合には、時間と経費という2つが目的関数となります。例えば電車、飛行機以外に自転車で行くことも考えられますが、自転車で行くと道中の宿泊費等を加味すると電車で行くよりも高がつき、かといって飛行機よりも時間がかかるので、自転車で行くというのはパレート解とはなり得ません。パレート解とはある意味トレードオフ、つまり一得一失を表すような曲線になっています。

実際にどの交通手段で行くべきかは、その時の状況によって異なりますが、状況に応じて適切な解を選択するためには、可能な選択肢全体の集合であるパレート解全体の構造が分かっている必要があります。

—企業とはどのような共同研究をされているのでしょうか。

「Hitachi Hokudai Lab. & Hokkaido University Contest」は、日立製作所と北海道大学共催のプログラミングコンテストで、関西大学も問題作成等で協力しています。2020年度は国内外から1,700人の参加がありました。複雑化する社会課題解決に向けて、明確な評価基準とアルゴリズムの考案を目的としたコンテストで、これまで、アニーリングマシンの前処理技術に関する問題、買物支援サービスや地域エネルギーシステムの時空間最適化技術に関する問題等を出題しました。最適解を求めるアルゴリズムの問題ですが、その背景にあるのが、前述の多目的最適化です。

コンテストを通じて考案されたアルゴリズムは、実応用に向けた検討を実施し、国際会議で研究成果を発表しています。2020年度は、優秀者と成果をまとめた論文「ナノグリッドネットワークで複数の電気自動車を使用することによる輸送と電力管理の多目的時空間最適化」を上梓しました。



■最適な構造設計を構築するトポロジー最適化

—今後の抱負をお聞かせください。

現在、トポロジー最適化の共同研究にも取り組んでいます。トポロジー最適化とは、与えられた制約のもと、ある目的関数を最大化あるいは最小化するような材料の密度分布を導き出す手法です。例えば、車体を重量の制約のもとその強度を最大化するなどの問題は典型的なトポロジー最適化の問題です。しかしながら、従来のトポロジー最適化の手法では、導き出された材料分布が、実際に作りやすいかどうかにはあまり注意が払われておらず、ものづくりへの応用は限定的なものでした。そこで我々は作りやすさを考慮したトポロジー最適化の手法「幾何学的特徴量に対する偏微分方程式系に基づく幾何学的特徴制約付きトポロジー最適化(積層造形における幾何学的特異点を考慮したオーバーハング制約法)」を提案し、2021年4月に日本機械学会賞(論文)を受賞しました。上の車体の例でも、強度だけではなく作りやすさ等も考慮すれば、トポロジー最適化の問題も多目的最適化の問題となりますので、多目的最適化の手法が応用できる可能性もあります。

—関西大学に着任されて1年ですが、関西大学の印象を教えてください。

— It has been a year since you started working at Kansai University. Please tell us your impression of Kansai University.

The university is unique and different from others in that the Department of Mathematics is independent under the Faculty of Science and Engineering, and that specialized education is being developed. I think this is one of the characteristics of the university. Also, the professors at the mathematics department are wonderful, and I am hoping to do joint research with many of them.

—最後に、学生の皆さんへのメッセージをお願いします。

近年は分野の流行り廃りが激しいです。例えば深層学習等、数十年前には見向きもされなかった技術が、計算機等の性能の向上とともに一躍注目されるようになりましたし、今後も量子コンピュータ等の新しい技術がどんどん出てくると期待されます。しかしながら、そのような変化の激しい時代であっても、それらの技術の基礎となる数学の体系は大きくは変化していません。大学では目先の役に立つ技術を習得するだけでなく、変化の激しい時代を生き抜くための知識をぜひ身につけてください。

tional conferences. In FY 2020, we published a paper “Multi-objective Spatio-temporal Optimization of Transportation and Power Management by Using Multiple Electric Vehicles in Nanogrid Networks,” which summarized the top performers and the outcomes.

■Topology optimization to construct the optimal structural design

—What are your aspirations for the future?

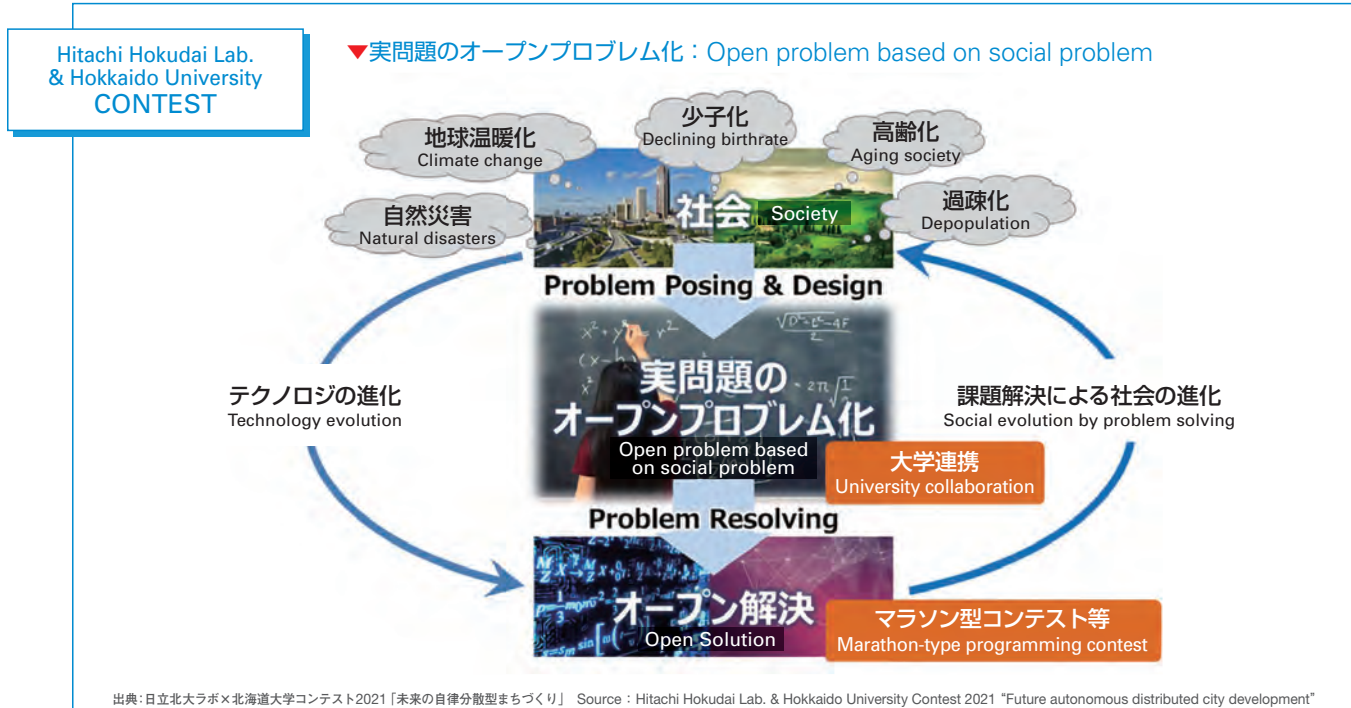
I am currently engaged in joint research on topology optimization. Topology optimization is to optimize material distributions under certain constraints to maximize or minimize a certain objective function. For example, maximizing body stiffness of a car under a weight constraint is a typical problem in topology optimization. In the previous studies, manufacturability of optimum material distributions has not been taken into account and thus their application to the actual manufacture was limited. We proposed a method in topological optimization taking manufacturability of optimum material distributions into account in the paper “Topology optimization with geometrical feature constraints based on the partial differential equation system for geometrical features (Overhang constraints considering geometrical singularities in additive manufacturing)”, which was awarded the Japan Society of Mechanical Engineers Medal for Outstanding Paper in April 2021. In the example of car design, by taking its manufacturability into account on top of body stiffness, its optimization problem becomes a multi-objective optimization problem.

— It has been a year since you started working at Kansai University. Please tell us your impression of Kansai University.

The university is unique and different from others in that the Department of Mathematics is independent under the Faculty of Science and Engineering, and that specialized education is being developed. I think this is one of the characteristics of the university. Also, the professors at the mathematics department are wonderful, and I am hoping to do joint research with many of them.

— Finally, can you give a message to the students?

In recent years, research fields come in and out of fashion rapidly. For example, technologies such as deep learning, which were unheard of a few decades ago, have suddenly gained attention as the performance of computers and other devices has improved, and new technology such as quantum computers is expected to emerge in the future. However, the foundation of mathematics underlying these technologies has not changed significantly even in this time of rapid changes. I hope you will not only acquire skills that are immediately useful, but also the knowledge to survive through this time of rapid changes at the university.



研究最前線

ネットワーク工学の研究・Research on Network Engineering



小さな一つひとつが、
大きな全体として
知的に振る舞う

スマホやロボットを使ってネットワークの力を応用

Each small thing acts
intelligently as part of
a greater whole

Applying the power of networks
using smartphones and robots

●環境都市工学部 滝沢 泰久 教授

• Faculty of Environmental and Urban Engineering
— Professor *Yasuhisa Takizawa*

イワシの群れの動きに目を奪われたことはないだろうか。一匹一匹は小さな魚なのに、集団になると一つの生き物のように統制のとれた振る舞いをする。脳も同様に、無数の神経細胞がネットワークを構築して知性を生み出している。このネットワークの力を工学応用しようとするのが、環境都市工学部の滝沢泰久教授だ。

Have you ever been amazed by a school of sardines? An individual sardine is small, but upon forming a group, they act together like a single creature. Likewise, in the brain, an infinite number of neurons build a network in a similar way, which creates intelligence. One person who is attempting to apply the power of such a network to engineering is Prof. Yasuhisa Takizawa of the Faculty of Environmental and Urban Engineering.

■ネットワークを知能としてとらえる

—専門分野について教えてください。

ネットワーク工学です。近年急速に進化している「IoT(モノのインターネット)」「ビッグデータ」「AI」という情報処理の3分野のうちのIoTに関連します。自動車のエンジンや橋脚などさまざまなモノにセンサーと無線機を付け、その情報を無線ネットワークを通してインターネット上に集めるという技術です。

ネットワークには、データを運ぶ伝送路やデータベースといった側面があります。私たちはその先の「ネットワークを知能としてとらえたら、いろいろなことができそうだ」という視点で研究しています。脳は、神経系がネットワークを作ることによって、日々の体験を記憶として蓄えています。魚や鳥の群れも、全体として非常に知的な振る舞いをするネットワークです。

—イワシの群れは、捕食者が来たら柔軟に形を変えますね。一つの生き物のように。

一匹一匹は狭い範囲しか見えていませんが、集まるとそのような構造になります。一つひとつは非常に単純で局所の情報しか得られないのに、それぞれが相互作用して全体で知的な構造を示す。それがネットワークの力です。

■人やモノの位置を把握するシステム

—具体的な研究内容を紹介してください。

研究の柱は4つあります。このうち、分かりやすい「自己組織型の屋内測位」と「群知能を使った移動センシングクラスター」について説明します。

自己組織型の屋内測位は、イベント会場や工場などで人やモノの動きを知るためのシステムです。最近、IoTやDX(デジタルトランスフォーメーション)の分野で、人やモノの位置の把握は非常に価値があると認識されています。例えば、ショッピングモールは、人の動線を管理してセールスプロモーションに活用したり、工場や建設現場では、安全管理のために人の動きを把握したり。また、病院や空港、イベント会場では、入院患者や搭乗予定客、来場者の位置を正確に知りたいなどの、多くのニーズがあります。

屋外ならGPSが利用できますが、屋内では決め手となるシステムがありません。電波を発する機器やカメラを使う方法ではたくさんの装置や頻繁なレイアウト変更が必要で、コストが掛かり維持管理が大変です。そのため、機器を設置しなくても人やモノの位置を特定するシステムを開発しました。

—どのような仕組みになっているのでしょうか。

対象者のスマートフォンを利用する場合、どのスマートフォンが隣接しているかと、その隣接するスマートフォンが発する電波の強弱の情報をアプリでサーバーに送ります。サーバーに集まった情報から、全スマートフォンの隣接関係が分かり、これによりサーバー内で仮想的スマートフォンのネットワークを構成できます。ただし、スマートフォンの位置は不明ですので、スマートフォンの隣接関係のネットワークはランダムで未構造な状態です。このランダムなネットワークに取得したスマートフォン間の電波情報を繰り返し入力すると、未構造だったネットワークが自律して、ネットワーク構造を作り上げていきます。できた構造はネットワークのジオメトリ(形)を再現しており、ネットワークの形が分かるので、それを構成するスマートフォンの位置も分かることになります。つまり、何も設備がなくても、人が集まれば位置が分かることになります。このようにランダムで未構造な集団が、互いに相互作用し構造を作り上げていくことを自己組織化と言います。

■Considering a network as intelligence

— Tell us about your specialist area of research.

I specialize in Network Engineering. Of the three information processing fields—"Internet of Things (IoT)," "Big Data," and "AI"—which have been progressing rapidly in recent years, network engineering is related to the IoT. It is a technology that collects information on the Internet through wireless networks by attaching sensors and wireless devices to various things such as automobile engines and bridge piers.

A network has some characteristics such as being a transmission channel for data and a database. Taking a step further, we are conducting research from the viewpoint that "if it were possible to consider a network as intelligence, it would be possible to do a variety of things." The brain stores daily experiences as memories via networks created by the neural system. A school of fish or a flock of birds is also a network that acts as a whole very intelligently.

— A school of sardines changes its shape flexibly when a predator approaches, doesn't it? It looks like a single creature.

An individual sardine can see only a small area. However, when sardines school up, they form a structure. A sardine is very simple and can get only a limited range of information, but they interact with one another as a whole and display an intellectual structure. That is the power of a network.

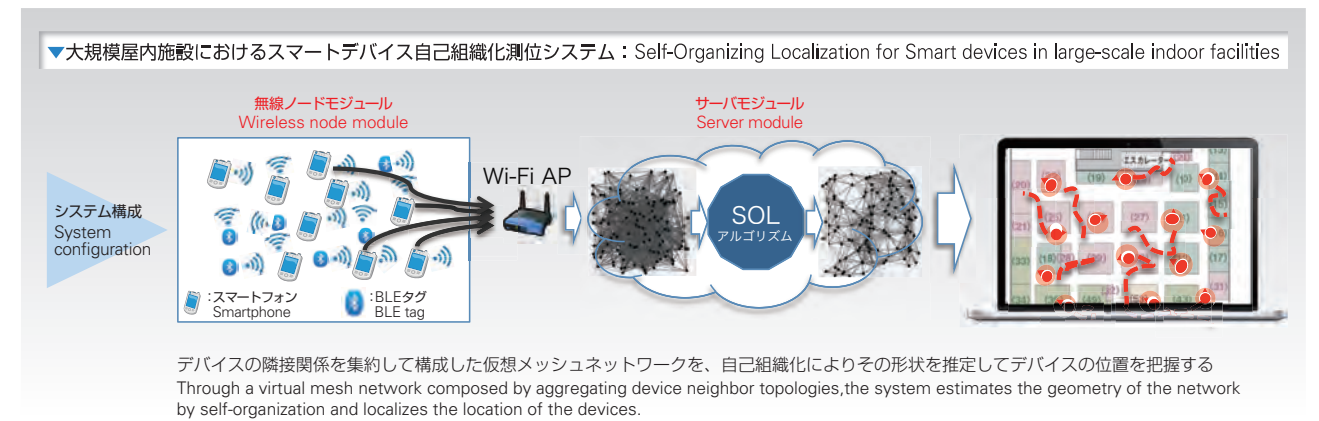
■A system for capturing the positions of people and things

— Tell us about the contents of your specific research field.

There are four pillars in our research. Of these, I will explain "self-organizing indoor localization" and "mobile sensing cluster using swarm intelligence," which may be easy to understand.

Self-organizing indoor localization is a system for identifying the movements of people and things at an event site or a factory. Recently, in the fields of the IoT and Digital Transformation (DX), it has been recognized that it is very valuable to identify the positions of people and things. For example, a shopping mall manages the flow patterns of people for sales promotions and a factory or construction site monitors the movements of workers for safety management. In addition, there are a lot of needs at hospitals, airports, and event sites; for example, there might be a need to accurately know the positions of patients who are hospitalized, customers who will board an aircraft, and visitors who have visited an event site.

GPS is available at outdoor sites, but there is no decisive system available at indoor sites. If a method employs wireless devices and cameras, it is necessary to use many devices or to change the layout frequently, which may be costly and make the system difficult to maintain. For this reason, we have developed a system for identifying the positions of people and things without installing infrastructure equipment in advance for the positioning.



研究最前線



ネットワークにおける自己組織化は、自然界や社会活動などあちこちで見られます。天体は重力で相互作用し、対数螺旋のネットワーク構造を作っています。また、人に置き換えると大学入学直後は友達関係がありませんが、次第に共振合って人間関係のネットワークを構築していきます。同様に経済活動における企業間取引ネットワーク、国家間経済同盟、国家間軍事同盟も自己組織化の実例と言えます。

群れを分散させて要救助者を探す

—次は、群知能を使った移動センシングクラスターについて教えてください。

魚や鳥の群れが知的な振る舞いをするのだから、ロボットを集めても同じことができるだろう、という発想から生まれた研究です。想定しているのは、地震などの災害によって人ががれき等に埋もれてしまった状況です。私たちは、体温を検知するセンサーなどを積んだ多数のロボットを使って探す方法を考えました。

例えば、50台のロボットで探すとします。1台が「この辺に居そうだ」という有力な情報を得た時に、数台が群れとなって近辺を重点的に探せば効率的です。そういう群れがあちこちでできるわけです。高性能な1台ではなく、簡素な機能ですがたくさんのロボットが群を形成する方が、柔軟で多様性・拡張性が高いと考えます。

柔らかいネットワークは「生きている」

—ネットワークって面白いですね。

多様性を内包したネットワークは、状況の変化に対応できます。人間にもいろいろな人がいて、こういう時に活躍するグループ、別の場合に活躍するグループと集まる人によって活躍の場面が異

なるグループは自然にできあがりますよね。それと同じです。

情報処理の世界には、最適化や収束を美德とする考え方があります。しかし、特定の状況に最適化してしまったネットワークは変化に対応できず、生命体としては死滅することになります。私たちは状況が変わるものに適時適応するため、ネットワークにおいて、収束させることなく変遷させ、最適化して選択肢を狭めるのではなく、多様性を内包するしなやかで生命体のような構造を作り出すことを目指しています。

ただ、生命体を模したメカニズムは、時として判断を間違えることがあるんですよ。また、実際に動かしてみないとどのような構造を作り出すかわかりません。柔軟な構造を保ちながら、間違いをどれだけ抑えるか。それが工学応用をする上で最も重要な課題で、面白さを感じる点でもあります。

社会で使われる技術を開発しよう

—研究室のモットーは何でしょうか。

研究のための研究では面白くありません。実際に社会で使われる技術を開発しよう、という目標を掲げています。そのため、技術展示会に出向き、いろいろな企業と接触するようにしています。学会での議論は深いけれど狭い。展示会では考えもしなかった意見を聞くことができ、視野が広がります。展示会で刺激を受け、研究の方向性を変えようかと検討することもあります。

自己組織化や群知能は、自然界や人間の社会活動において見ることのできるメカニズムであり、構造を作り上げて、構造を変えていく深遠なテーマとして考えています。そしてこれらに共通する振る舞いは変遷と多様性です。私たちは最適化や収束ではなく、この変遷と多様性を求める研究をしています。

How does the system work?

When a target person uses their smartphone, a smartphone sends the following information to a server: which smartphone is located neighbor to the smartphone and the strength of radio signals received from the neighbor smartphone. From the information collected at the server, it is possible to identify the neighbor relationships of all smartphones, which makes it possible to establish a virtual network of smartphones on the server. However, the positions of the smartphones are unknown. Therefore, the network of the neighbor relationships of smartphones is random and unstructured. The information collected on the strength of radio signals between smartphones is repeatedly input to this random network. Through these repeated inputs, a structured network emerges autonomously from the unstructured network. In the structure created, the geometry (shape) of the network is reproduced, so it is possible to know the shape of the network. Therefore, it is possible to identify the positions of smartphones that compose the network. In other words, even if there is no infrastructure equipment for the positioning, it is possible to identify the positions of people when they gather. As I have described, a random, unstructured group gradually builds a structure by having individuals interact with one another, which is called self-organization.

Self-organization in networks can be seen here and there in the natural world, in social activities, and in other areas. Celestial bodies interact with one another via gravity, which creates a logarithmic spiral network structure. When this mechanism is applied to human beings, it can work as follows: people who have just entered a college have no relationships with friends, but they gradually resonate with other people and build networks of human relationships. Similarly, business-to-business transaction networks in business activities, economic alliances among nations, and military alliances among nations are also actual examples of self-organization.

Disperse clusters, and searching for people who need help

—Next, tell us about the mobile sensing cluster that uses swarm intelligence.

This research was born out of the idea that a school of fish and a flock of birds act intelligently, so robots would also be able to act in the same way by working together. We assumed a situation where people are buried under rubble due to a disaster such as an earthquake. We came up with a method for searching for people using many robots equipped with sensors that can detect human body temperatures.

For example, suppose you search for a person using 50 robots. When a robot gets promising information, such as "a person might be buried around here," it is efficient for several robots to search the neighborhood intensively together as a cluster. Such clusters would be created here and there. We think that a method for collecting information using many simple functional robots is more adaptable and scalable than a method using a single high-performance robot.

A soft network is "alive"

—Networks are interesting, are they not?

A diversity-encompassed network can respond to changing situations. Human beings are diverse; for example, a certain group might play an active role in a certain situation, while another group might play an active role in another situation. In such a way, a group that plays an active role in a different situation is created spontaneously depending on the people who have gathered together. A diversity-encompassed network is the same.

In information processing, there is a similar thought that optimization and convergence should be considered as virtues. However, a network that has been optimized for a particular situation cannot respond to changes and will die like a living organism. To adapt to changing situations at the right time, in a network, we aim to create a

structure like a living organism via diversity and encompass flexibility by having the network change without making it converge, instead of optimizing it by narrowing down choices.

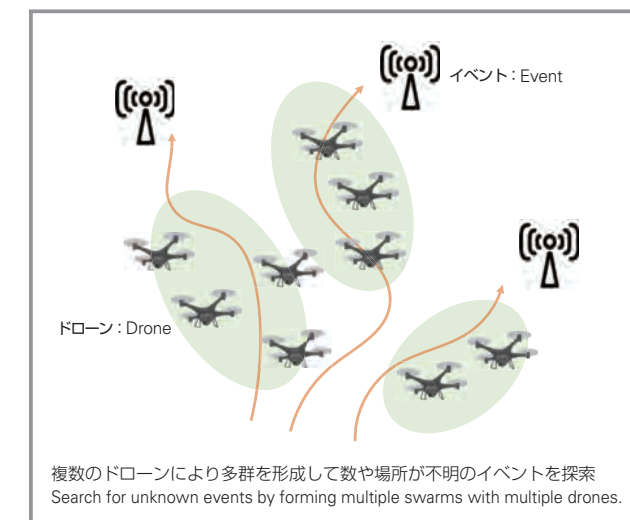
However, a mechanism that imitates a living organism sometimes makes errors in judgment. In addition, we don't know what kind of structure the mechanism will create until the mechanism is actually operated. To what extent can the mechanism eliminate mistakes while maintaining a flexible structure? This is the most important issue in engineering applications. It is also a point that interests us.

Developing technologies that can be used in our society

—What is the motto of your laboratory?

Research is not interesting if the goal is just to carry out research. The target we have set is to try to develop technologies that will be used in our society. Therefore, we try to visit technology exhibitions and contact various companies. Discussions at academic conferences are deep, but narrow in scope. At an exhibition, we can hear opinions from various people that we had never considered, and we can broaden our perspectives. There are also cases where we gain inspiration from an exhibition and consider whether or not to change the orientation of our research.

Self-organization and swarm intelligence are mechanisms that can be seen in the natural world and in the social activities of human beings, and we think of them as profound themes for creating a structure and then changing that structure. Actions common to them are transitions and diversity. We have been conducting research that searches for these transitions and diversity, not for optimization and convergence.



LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [卒業生インタビュー]

人々の囁む、笑う、 生きるを支える 100年企業を率いる

研究一筋から経営トップへ

●株式会社松風 代表取締役社長
根来 紀行 さん 一大学院工学研究科 1981年修了—

超高齢社会の中で、健康的な生活の維持・向上のために、歯の健康を守る歯科医療の役割はますます大きくなっていくだろう。歯科材料、機器の開発、製造、販売を行うメーカーである株式会社松風の根来紀行社長は、国内外を問わず、どのように歯科医療に貢献していくか、自社の目標とする将来像を明確に打ち出し、歯科医療の進歩とともにあった100年の歩みのその先へ進んでいく。

●恩師の一言で、今の自分がある

松風という社名を聞いて、「ああ、あの会社」と思い当たる人は少ないかもしれない。しかし、歯科治療を受けたことがある人ならば、かなりの確率で松風の製品に出合っているはずだ。松風はむし歯を削る研削材、削ったあとに詰める充填材など、歯科医院や歯科技工所で使用する歯科器材を扱う企業。関西大学が大学昇格を果たしたのと同じ1922年、日本人の骨格に合う人工歯(陶歯)の開発に成功したことを機に創業した。以来、高い研究開発力で多くの日本初、世界初の製品を世に送り、人工歯は国内シェア4割近くを占めている。

現在、日本の歯科医療を支え続けてきたこの企業の代表取締役社長を務めるのが根来紀行さんだ。

関西大学大学院工学研究科修了後の1981年、研究職として入社してから、研究の現場一筋にキャリアを積んできた。研究開発の仕事は、学生の時から希望だった。そんな根来さんも大学入学後2年ほどは、当時の大学生らしく先輩から譲り受けた自動車と友人と遊びに出かけたり、工業英語研究会というサークルでいろいろなイベントを企画したりしたものだが、3年次生になったころには、根来さんいわく「心を入れ替えて」学業優先の生活に切り替えた。



◀(左) 大学院時代の仲間たちと(左後列が根来さん)
(右) 学部生の指導をする大学院生の根来さん(左が根来さん)

根来 紀行—ねごろ のりゆき
■1956年京都府生まれ。1979年関西大学工学部応用化学科卒業。81年関西大学大学院工学研究科博士課程前期課程修了。同年3月、松風陶歯製造株式会社(現 株式会社松風)入社。2003年取締役研究開発部長。07年常務取締役。09年より代表取締役社長。

4年次生で高分子化学の研究室に学び、大学院では高分子設計の原点を学びたいと思い、有機合成の研究室に進んだ。

「学部の時とは違う領域でしたので、まずは研究テーマを決めることから始めなければならず、大学院の2年間は大変でしたが、結果を出すために、一から研究計画を立てた経験は入社後も役に立っています」と振り返る。

しかし、就職先はすんなり決まったわけではなかった。既に内定がほぼ確定した企業があったが、研究職ではなかった。自身の進路に迷った根来さんは、研究室の指導教員の山田富貴子教授(当時)に相談する。そのときに「こんな会社があるよ」と教えてくれた会社こそ、松風だった。知らない会社だったが、研究職の募集だったことから飛びついた。しかし、採用される保証はない。しかも、すでに就活シーズンのピークを過ぎた11月。こんな時期に内定が決まりかけていた会社を断り、就職活動を一からやり直すという無謀ともいえる決断だった。

「私は幸運だったのかもしれませんが。あの時、山田先生の一言がなかったら、恐らく今の私はないでしょう。やはり、恩師は偉大です」

●革新的な製品開発に次々と携わる

入社後、研究開発部に配属されると、右も左も分からぬまま、光重合型コンポジットレジン「松風ライトフィル」の開発プロジェクトに。これは光を当てると固まるペースト状の樹脂の充填材で、歯科医師の作業の精度と利便性を格段に向上させるものだった。

その後も、健康保険適用に認められた硬質レジンの人工歯「エンデュラ」など画期的な製品の開発に次々と携わった。なかでも、特に印象深いと振り返る仕事が、初めてリーダーとして関わった光重合型歯冠用硬質レジン「ソリデックス」の開発だ。ソリデックスは差し歯の金属製土台に盛り付ける樹脂製材料で、歯科技工士が形を作り上げることで天然歯と変わらない見た目に仕上がるもの。

「1つの歯を作るために、構成するいくつかの異なる部分をそれぞれ開発しなければならないので大変でした。使いやすさや耐久性だけでなく、審美性、経済性、室温で長期間品質を保持できる等の貯蔵寿命(シェルフライフ)などのバランスも考えなければいけません。歯科技工士の方々に話を伺って、どんなものを作るべきかを探ってきましたが、最終ターゲットの設定が一番難しかったですね。研究はターゲットを決めることで、初めてそこに向かってプロジェクトメンバー一人ひとりが進んでいくことができるんです」

こうして、幅広い知識と経験を積み重ねながら、研究開発部長、取締役と、社内での立場が変化するとともに、仕事に対する考え方も変化していった。

「研究開発の仕事は楽しかったです。当初は、担当の研究が完成した時の達成感に満足していました。そこから、開発したものを使っていただける、皆さんに喜んでいただけることに喜びを感じるように、だんだん感覚が変わってきました。品質には自信を持っていますので、歯科を受診される際に松風の製品をお使いいただけたら嬉しいですね」



国産初の光重合型コンポジットレジン「松風ライトフィル」

SOLIDEX
LIGHT-CURING C&B COMPOSITE
光重合型歯冠用硬質レジン「ソリデックス」

国産初の硬質レジン歯「エンデュラ」

●トップの役割はきちんと目標を設定すること

根来さんは、社長に就任すると、早速2012年に長期ビジョンを策定。当時、連結決算で150億円程度の売上高を500億円に拡大するという大胆な構想を打ち出した。

「当社の経営理念は『創造的な企業活動を通じて、世界の歯科医療に貢献する』です。これを実践するのが、社長である私の役目。もっと当社の製品を世界で使っていただけるようにはなりません。そこで、貢献のバロメーターの一つである売上目標をまずは500億円としました。目標を示せば、社員一人ひとりが正しく理解して取り組みます。目標を達成するには何をすべきか、例えば、製造設備や海外の販売拠点の拡充が必要ではないか、とみんなが考えて行動することができます。トップの役割はターゲットを設定することです。そして、それを繰り返し伝え、共有していかなければいけません」

売上目標の達成はまだこれからだが、現在、売上高は約280億円(2021年度末現在)に達している。海外での売り上げも増加している。

「学生時代から『為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の 為さぬなりけり』『少年老い易く学成り難し 一寸の光陰軽んずべからず』の2つの言葉を心の支えにしてきました。任された仕事はすべてやりきるという気持ちで、仕事と向き合ってきました。早く目標を達成して、社員と一緒に喜びを分かち合いたいですね。でも、それも通過点に過ぎません。工学部で学んだ以上は、今を生きている人のために役に立つものを生み出すのが使命だと感じています。歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士の皆さんの仕事に役立つもの、最終的には患者の皆さんに喜んでもらえるものをもっと開発していきたいですね。松風では、治療だけではなく、予防に関わる製品開発にも取り組んでいます。歯科医療の分野はまだまだ進歩します」

2022年5月15日、株式会社 松風は創立100周年を迎えた。京都市東山区にある本社では新しい施設の建設も進んでいる。次の100年先にも人々の輝く笑顔のために、漕ぎ出した松風という船の船先に立つ根来社長は、進むべき針路をしっかりと見据えている。



スイスから日本へ。20年のキャリア オリンピックにおける ブランド戦略を实践

日本のポップカルチャーに魅せられて

●パナソニックオペレーショナルエクセレンス株式会社
アミゲ ジョナスさん —社会学部2009年卒業—

関西大学のキャンパスは国際色が豊かで、1,000人以上の留学生が学ぶ。留学生の中には卒業後も日本にとどまり、活躍している人も少なくない。スイス出身のアミゲ・ジョナスさんも、その一人。社会学部を卒業後、パナソニックに入社し、現在はオリンピック・パラリンピックを通じた同社のブランドマーケティングに取り組んでいる。

●2024年、パリ・オリンピックに向けて

アミゲさんの勤務場所、パナソニックセンター東京は江東区有明にある。東京2020オリンピックのテニスや体操の競技会場に近く、メインプレスセンターが置かれた東京ビッグサイトも徒歩圏内だ。

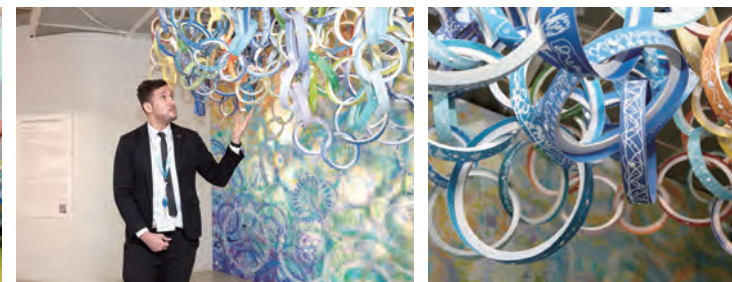
パナソニックはオリンピック・パラリンピックのワールドワイド公式パートナー。近未来的な外観を持つパナソニックセンターは、東京大会の期間中、世界に向けてパナソニック・ブランドを発信する場になるはずだった。しかしコロナ禍で無観客開催となり、有明が世界中から集まった人でにぎわうことはなかった。「大

会運営でのテクノロジーの活用は予定通りでしたが、アクティベーション(スポンサーの権利を活用して行うマーケティング活動)はほとんどできませんでしたね」。アミゲさんは流ちょうな日本語で苦笑交じりに語る。

しかし振り返っている暇はない。2024年のパリ大会に向けた戦略を練るのが次のミッションだ。IOC本部との窓口を務め、国内外の意見を集約しながら「東京大会や北京冬季大会で十分に活動できなかった分、パリでは『テクノロジーとスポーツを通じて理想の社会を作る』というパナソニックのメッセージを浸透させたい」と意気込む。



▲(左)パナソニックセンター東京でのオリパラムーブメント醸成イベント
(右)ワークショップガーデンで子ども向けプログラムを実施するアミゲさん



▲東京大会のテーマを反映した、日米の子どもたちによる作品「United by Emotions (2021)」
(2020 日米芸術家交換プログラムプロジェクト ベン・ヴォルタ、桑門超、佐倉康之らによるコラボレーション作品)

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [卒業生インタビュー]

●身近で面白そうな国、日本へ

スイスは4つの公用語がある多言語国家。アミゲさんも英語、フランス語、ドイツ語などを操るが、母国スイスでは特別なことではない。「他の人が使っていない、珍しい言語を学びたい」。高校を卒業する頃、そう考えたアミゲさんの頭に浮かんだのが日本語だった。実は幼い時から、日本には親しみがあつた。理由はアニメだ。「ドラゴンボール」「聖闘士星矢」「シティーハンター」など、スイスでは多くの日本のアニメがテレビで放映されていた。浴びるほど見ているうちに、アミゲ少年の心の中で日本は遠い国ではなくなっていたのだ。長じて北野武監督、庵野秀明監督などの映画作品にも出会い、ますます日本への関心が高まった。「この国は面白そうだ」。高校卒業、兵役終了後に貿易関係の仕事で貯めた資金を元手に、2003年に来日した。

まずは大阪・天王寺の日本語学校に入学。大阪の下町を散策したり、お笑いの劇場を訪れたり日本生活を満喫するうちに、「この国をより深く理解したい」という思いが強まり、日本で大学進学することを決意。当時マスコミ志望だったことから、マスコミ学を専攻できる関西の大学を探そうと関西大を知る。「見学に行ったらキャンパスが広々としていて、すごく雰囲気が良くて、『この大学に入るために努力しよう』と思いました」。半年間の猛勉強の末、2005年の春、社会学部に入学した。

●印象深い関西大学の授業

「関大は期待通りの大学でした。設備も最新で、静かな環境の中で効率良く、徹底的に学ぶことができました」。大学生活の中で忘れられないのは大学職員との交流。国際交流センター(当時)やキャリアセンターに頻りに通い、学生生活や就職のサポートに限らず、さまざまな会話を楽しんだ。中でもキャリアセンター職員の土井康順さんとはアニメやマンガなどの趣味が合い、「心がつながった」と懐かしそうに語る。

学びの面では、特に小川博司先生の授業が印象に残る。松田聖子などアイドルのヒット曲を社会やマスメディアの状況と結び付けて論じる、社会学的視点からポップカルチャーを分析するユニークな内容だった。「学校近くのレンタルショップで、過去のヒット曲のCDなどを借りて、一生懸命歌を覚ええましたよ」。ポップカルチャーやマスメディアの動向を、日本社会の変遷と結びつけて深く学ぶことができたという。



●「SPORTS × MANGA」

松下幸之助の理念に共感し、卒業後はパナソニックに入社。2年間の工場勤務でものづくりの基本を学び、営業企画部門に移ってグローバル宣伝に従事。2017年春の人事にあたり、「東京オリンピックは一生に一度の機会」と、オリンピック・パラリンピック課を希望した。残念ながら大会はコロナ禍で不完全な形だったが、得難い経験もできた。2019年7月に特別企画展「SPORTS × MANGA」をプロデュースしたことだ。

液晶ディスプレイやプロジェクターなどパナソニックの最新テクノロジーを駆使して、100タイトル以上の日本のスポーツマンガを紹介。その歴史と社会に与えた影響を示しつつ、マンガで描かれた精神やトレーニング方法、作品に憧れて競技を始めたアスリートとの関係などをオリンピック・パラリンピックのバリュー(価値観)と重ねて展示した。「作品の描かれた当時の新聞や雑誌も紹介して、ポップカルチャーと社会、メディアとのつながりにもアプローチしました。関大で学んだことにつながりますね」。会場には1970年代以降のヨーロッパにおける、日本アニメ文化の受容の歴史を紹介するコーナーも設けた。少年時代の日本アニメとの出会いと関大での学びが、一つにつながった。

●思いを伝えるためのツールを

「1年半ぐらい」のつもりで来日して、すでに20年。この間、日本を離れたと思ったことは一度もない。関大での4年間で「つらいことや後悔は全くなかった」という。「『こんなはずじゃなかった』と感じるのは事前のリサーチが足りない証拠ですよ」。そんなアミゲさんに、関大で学ぶ後輩たちへのメッセージを聞いた。

「自分の思いをしっかりと持ち、その思いを伝えるためのツールを手に入れてください。自分ならではのユニークさを武器にしましょう」

多言語国家から「他の人が知らない言葉をマスターしたい」と異国に飛び出し、日本でキャリアを積み上げたアミゲさんならではの言葉だろう。



▲(左)同じマスコミ専攻出身の親友とスイス・ベルビエにて/ (右) 関西大学卒業式で友人と

アミゲ ジョナス—Jonas Amiguet
■1981年、スイス・ローザンヌ生まれ。2003年に来日。2009年関西大学社会学部マス・コミュニケーション学専攻(現・メディア専攻)卒業。同年パナソニック電工株式会社(当時)入社。現在はパナソニックオペレーショナルエクセレンス株式会社 ブランド・コミュニケーション部門 ブランド戦略センター オリンピック・パラリンピック課でマネージャーを務める。

◎「高松塚古墳壁画発見50周年」講演会・展示会を開催

極彩色の壁画、歴史的発見の記憶と継承



今から50年前の1972年、高松塚古墳(奈良県明日香村)の発掘調査が奈良県立橿原考古学研究所によって実施され、所長の末永雅雄・関西大学名誉教授の指導のもと、網干善助教授(当時)と考古学研究室の大学院生や学生、地元有志などが参加。深さ3mの盗掘穴の底にあった石槨内部に極彩色壁画を発見した。

3月12日千里山キャンパスにおいて、壁画発見から50周年を記念する「高松塚古墳壁画発見50周年記念講演会」が開催され、校友の来村多加史大阪南大学教授が「東アジアから見た高松塚古墳」、本学博物館長の西本昌弘教授が「高松塚古墳の被葬者論」、文学部の米田文孝教授が「飛鳥の終末期古墳」について、近年明らかになってきた知見などを講演した。続いて討論会も行われ、参加者約100人は真剣な面持ちで耳を傾けていた。

また、3月1日から6月30日(木)まで、関西大学博物館において同テーマの展示会も開催中。中の壁画を見ることができるとともに、古墳石槨の原寸大模型をはじめ、壁画の復元図や発見に関する新聞記事、数々の記念品などが並べられ、発掘調査にあたった人々の情熱や地域住民の支援など、50年の軌跡が直に伝わる内容となっている。



▲(左)1972(昭和47)年、NHK特別番組で網干名譽教授が解説に使用した高松塚古墳模型(右)高松塚古墳壁画の復元図

◎第30回「関西大学体育振興大島鎌吉スポーツ文化賞」授与式を挙行

2021年度に活躍した関大アスリートの功績を称えて



3月4日千里山キャンパスにて、関西大学が誇る偉大なオリンピック・大島鎌吉氏に由来する、第30回「関西大学体育振興大島鎌吉スポーツ文化賞」の授与式を挙行した。

本学学生個人の部では、東京五輪に出場したセーリングの高野芹奈さん(人間健康学部4年次生・当時)、デフテニス世界一の実績を持つ喜多美結さん(化学生命工学部4年次生・当時)、プロ野球オリックス・バファローズに入団する野口智哉さん(人間健康学



▲前田学長からメダルを授与される喜多美結さん(左)／元阪神タイガース投手の岩田隼さん

部4年次生・当時)ら12人が受賞。団体の部では、アイススケート部、なぎなた部、剣道部、拳法部が受賞した。

また、「広く社会的なスポーツ文化に貢献し、顕著な実績を残した個人」として、卒業生の和田伸也さん(東京パラリンピック陸上1500m [T11] 銀メダリスト)、岩田隼さん(元阪神タイガース)、清水希容さん(東京五輪空手女子形 銀メダリスト)の3人に同賞を授与した。

JOINT PROGRAM ■社会貢献・連携事業/地域連携

◎大学×保護者会×大手書店×地域による街ぐるみ読書啓発企画「関大前まちかど図書館」が誕生

関西大学は、大手書店および地域との三者協働の読書啓発の取り組みとして「関大前まちかど図書館」を創設し、3月29日、フタバボウル関大前店にてオープニングセレモニーを開催した。



(上)「関大前ラボラトリ」エントランス
(下)ミニ図書館が開設された店舗



そのメイン拠点となるのは、千里山キャンパス正門前の関大前商店街にある教育・研究活動の拠点「関大前ラボラトリ」。さらに、商店街店舗の協力の下、各店舗内の空きスペースなどを活用して、計6カ所のミニ図書館が開設された。配架書籍は、保護者会である教育後援会、丸善雄松堂、紀伊國屋書店と前田裕学長がコラボレーションした『新入生に贈る100冊』と、吹田市・後藤圭二市長からの推薦図書10冊。主として本学学生が自由に手に取ることができ、手続き不要で2週間の貸し出しが可能となっている。また、関大前ラボラトリには全国紙5紙も配備。読書会や講演会、報道記者の出前教室などの展開も視野に入れ、活字をきっかけとした地域の活性化を目指していく。

◎法政大学・明治大学との三大学連携シンポジウムを開催

新型コロナ対応で見た「これからの大学のあるべき姿」



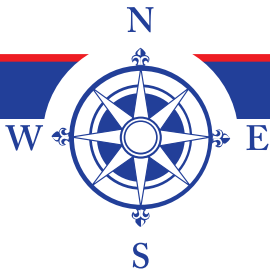
▲(左から)廣瀬克哉・法政大学 総長、前田裕・関西大学 学長、大六野耕作・明治大学 学長

関西大学、法政大学、明治大学は3月12日、連携シンポジウム「これからの大学のあるべき姿～新型コロナウイルス感染症への対応で見た課題と今後の展望～」をオンラインにて開催した。

前例のないこのパンデミックに対し、各大学では、遠隔授業への移行やオンライン留学の実施、オンライン会議の導入等の試行錯誤を繰り返しながら、新しい道筋を見出してきた。



本シンポジウムでは、大学間連携協定を結ぶ3大学の総長・学長がDX(デジタルトランスフォーメーション)を絡めた学びの展開等をテーマに講演。パネルディスカッションでは、各大学の新型コロナ対応の中で見た課題を整理しながら、ウィズコロナ・アフターコロナの大学のあり方について議論を深めた。



「関西大学 DXシンポジウム」を開催



関西大学は3月15日、デジタル技術を活用した次世代高等教育のあり方を探る「KU-DXシンポジウム」を開催した。本シンポジウムは、文部科学省「デジタルを活用した大学・高専教育高度化プラン」に採択された本学独自のDX学習環境「Global Smart Classroom (GSC)」を活用し、対面・オンライン併用のハイブリット方式で実施。事前に申し込みのあった大学や企業から約250人がオンラインで参加し、本学が展開する教育DXの先駆的取り組みや、次世代高等教育に向けて行うべきアクションについて、熱心に耳を傾けた。

KU-ORCAS 協賛の展覧会「サロン！ 雅と俗—京の大家と知られざる大坂画壇」を開催



展覧会「サロン！ 雅と俗—京の大家と知られざる大坂画壇」(京都国立近代美術館・朝日新聞社主催、関西大学アジア・オープンリサーチセンター (KU-ORCAS) 協賛)が、3月23日から5月8日まで、京都国立近代美術館にて開催された。

KU-ORCASでは、日本美術史上で埋もれた存在であった大坂画壇について、京都国立近代美術館、ロンドン大学SOAS、大英博物館と共に、日英の研究者が研究会を重ねてきた。本展覧会は、これらの研究の中で鮮明になった問題意識を提起するものであり、国際的な視野に立ち、京都と大坂の美術を通覧する大規模な展覧の機会となった。

キャンパス内の全ごみ袋を減プラ製品に切り替え

関西大学では4月から、SDGs推進の一環として、全キャンパス構内のごみ袋をすべて減プラ製品に切り替えた。導入されたのは、トウモロコシ由来のバイオマス原料を使用した「環境にやさしいエコごみ袋」。最大の特長は、市販のごみ袋の大半が100%プラスチック製品であるのに対し、同ごみ袋は25%が非プラスチック原料から成るということ。これにより、年間30万枚使用すると、約2.5トン分の廃プラスチック削減が実現する。

感染防止対策を行いながら、新入生歓迎行事を開催



4月1日から各キャンパスにおいて、新入生歓迎行事や各種ガイダンスが実施された。

千里山キャンパスでは2日と4日、感染防止対策をとりながら、各クラブ・サークルが新入生の勧誘活動を実施。3年ぶりに各団体によるパフォーマンスも披露された。また、3日には、新生活のスタートおよび学生同士の交流をサポートする「関西大学 新入生歓迎の集い2022」を2部制で開催し、計500人を超える新入生が参加。参加者全員に“食”支援の一環として米やそば、さらにUSBフラッシュメモリなど新生活に必要なもののプレゼントもあり、新入生たちは「キャンパスライフが楽しみになった」、「不安でしたが早速友達ができ、お土産までいただけてうれしかった」と声を弾ませた。

先生の魅力を動画で届ける「関大 先生チャンネル」開設

大学昇格100年記念事業の一環として、動画を活用した教員の魅力紹介ウェブサイト「関大 先生チャンネル—気づきを与える、知の動画アーカイブ—」を開設した。本学教員のさまざまな研究・教育活動、学外との共同・連携活動など、多様な視点から一人ひとりの魅力を効果的に伝えることにより、「学の実化」をさらに具現化することを目指す。関大らしい特色あるテーマ毎にプレイリスト化したコンテンツも設けており、それぞれの活動内容や知の魅力を学内外に発信していく。



● 関大 先生チャンネル
<https://www.sensei-ch.rd.kansai-u.ac.jp>

